山形県埋蔵文化財センター調査報告書第110集

四ツ塚遺跡

第４次発掘調査報告書

２００２

財団法人　山形県埋蔵文化財センター

山形県埋蔵文化財センター調査報告書第110集
四ツ塚遺跡第４次発掘調査報告書
財団法人　山形県埋蔵文化財センター

四ツ塚遺跡

第４次発掘調査報告書

平成14年３月

財団法人　山形県埋蔵文化財センター

１～４次調査出土の8世紀第４四半期から９世紀第１四半期の土器

１～４次調査出土の10世紀初頭の土器

序

本書は、財団法人山形県埋蔵文化財センターが発掘調査を実施した、四ツ塚遺跡の調査成果をまとめたものです。

四ツ塚遺跡は、山形県のほぼ中央に位置する西村山郡河北町に所在します。山形盆地の北端にあたるこの町は「紅花の里」として知られ、中心街である河北町谷地は、古くから最上紅花生産の中心地として栄えました。現在、町の平野部ではサクランボの栽培が盛んです。

この度、山形県立救護施設みやま荘改築整備事業に伴い、工事に先立って四ツ塚遺跡の第４次調査を実施しました。

調査では、古代の竪穴住居跡が２棟検出されたほか、２次調査と３次調査で検出された溝跡の延長部分を検出しました。また、縄文時代のものと考えられる陥穴も検出されました。

埋蔵文化財は、祖先が長い歴史の中で創造し、育んできた貴重な国民的財産といえます。この祖先の足跡を学び、子孫へと伝えていくことが、私たちの重要な責務と考えます。その意味で、本書が文化財保護活動の啓発・普及・学術研究・教育活動などの一助となれば幸いです。

最後になりましたが、調査においてご協力いただいた関係各位に心から感謝申し上げます。

平成14年３月

財団法人　山形県埋蔵文化財センター
理事長　木　村　　宰

例　　言

1　本書は、山形県立救護施設みやま荘改築整備事業に係る「四ツ塚遺跡」の第４次発掘調査報告書である。

2　調査は山形県健康福祉部障害福祉課の委託により、財団法人山形県埋蔵文化財センターが実施した。

3　調査要項は下記のとおりである。

遺　跡　名	四ツ塚遺跡　遺跡番号　481
所　在　地	山形県西村山郡河北町大字吉田字馬場164他
調査主体	財団法人山形県埋蔵文化財センター
調査期間	平成13年４月１日～平成14年３月31日
現地調査	平成13年５月14日～６月14日
調査担当者	調査第四課長　渋谷　孝雄
	主任調査研究員　斉藤　主税
	調査研究員　水戸部秀樹（調査主任）
	調　査　員　渋谷　純子

4　発掘調査および本書を作成するにあたり、山形県健康福祉部障害福祉課、河北町教育委員会、村山教育事務所、山形県立救護施設みやま荘等関係機関にご協力いただいた。

5　本書の作成・執筆は、水戸部秀樹（Ⅱ・Ⅲ・Ⅳ・Ⅵ・Ⅶ章）、渋谷純子（Ⅰ・Ⅴ章）が担当した。編集は須賀井新人、佐竹弘嗣、竹田純子が担当し、全体については渋谷孝雄が監修した。

6　委託業務は下記のとおりである。

遺構写真撮影　日本特殊撮影株式会社

基準点測量・水準測量　株式会社寒河江測量設計事務所

7　出土遺物、調査記録類については、財団法人山形県埋蔵文化財センターが一括保管している。

凡　　例

1　本書で使用した遺構・遺物の分類記号は下記のとおりである。

ＳＴ…竪穴住居跡　　ＳＢ…掘立柱建物跡　　ＳＫ…土坑
ＳＤ…溝跡　　ＳＥ…井戸跡　　ＳＰ…ピット
ＳＸ…性格不明遺構　　ＲＰ…登録土器　　ＲＱ…登録石器

2　遺構番号は、現地調査段階での番号を、そのまま報告書の番号として踏襲した。

3　報告書の執筆の基準は下記のとおりである。

（1）　遺構図に付す座標値は、平面直角座標系第Ｘ系により、高さは海抜高で表す。方位は座標北を示す。

（2）　遺構実測図は1/30〜1/300の縮図で採録し、各々スケールを付した。

（3）　本文中の遺物番号は、遺物実測図・遺物図版とも共通のものとした。

（4）　遺物実測図・拓本図は1/1〜1/6で採録し、各挿図にスケールを付した。

（5）　遺構実測図中の遺物実測図は、原則として1/8で採録した。

（6）　遺物実測図中の土器について、土師器は断面白抜き、須恵器は黒ベタで表示した。

（7）　遺物観察表中において、括弧内の数値は図上復元による推計値を示している。

（8）　基本層序および遺構覆土の色調記載については、1997年版農林水産省農林水産技術会議事務局監修の「新版基準土色帖」に拠った。

（9）　１次から３次調査の報告書に示された標高値は、誤認により実際の標高より2.75m高いことが４次調査で明らかとなった。ここで訂正する。

目　　次

Ⅰ　調査の経緯……1
Ⅱ　遺跡の立地と環境……4
Ⅲ　遺跡の概観……7
Ⅳ　遺構……9
Ⅴ　遺物……19
Ⅵ　第４次発掘調査のまとめ……25
Ⅶ　四ツ塚遺跡の調査成果（第１～４次調査）……26
註……31
報告書抄録……32

表

表１　土器観察表……24
表２　石器・礫観察表……24

挿　　図

第１図　調査区概要図……3
第２図　遺跡位置図……5
第３図　第４次調査区遺構実測図・基本層序柱状図……8
第４図　竪穴住居跡ＳＴ１……10
第５図　竪穴住居跡ＳＴ２……11
第６図　竪穴状遺構ＳＴ６……12
第７図　掘立柱建物跡ＳＢ65……13
第８図　溝跡ＳＤ７・９、ＳＫ39……15
第９図　溝跡ＳＤ11……16
第10図　陥穴ＳＫ５・８・19……17
第11図　ＳＫ４、ＳＰ50、ＳＫ27、ＳＰ52……18
第12図　遺物実測図（１）……21
第13図　遺物実測図（２）……22
第14図　遺物実測図（３）……23
第15図　ＳＴ１（４次）出土遺物……29
第16図　ＳＴ２（４次）出土遺物……29
第17図　ＳＴ６（４次）出土遺物……29
第18図　ＳＴ365（２次）出土遺物……30
第19図　ＳＴ22（３次）出土遺物……30

第20図　ＳＴ652（２次）出土遺物……30
第21図　ＳＴ658（１次）出土遺物……30
第22図　ＳＤ124（２次）出土遺物……30
第23図　四ツ塚遺跡遺構配置図　……付図

図　　版

巻頭図版　１～４次調査出土の８世紀第四半期からの９世紀第１四半期の土器
１～４調査出土の10世紀初頭の土器
図版１　四ツ塚遺跡調査区（１次～４次の空中写真を合成）
図版２　第４次調査区、ＳＴ１
図版３　ＳＴ２・６、ＳＤ７・９、ＳＫ39
図版４　ＳＤ11、ＳＫ４・５・８・19・27、ＳＰ50・51・52
図版５　第４次調査区出土遺物（１）
図版６　第４次調査区出土遺物（２）
図版７　第４次調査区出土遺物（３）
図版８　１～３次調査の主要な遺構（１）
図版９　１～３次調査の主要な遺構（２）
図版10　１～３次調査の主要な遺物（１）
図版11　１～３次調査の主要な遺物（２）

Ⅰ　調査の経緯

１　調査に至る経過

今回の発掘調査は、山形県立救護施設みやま荘改築整備事業に伴う第４次調査である。

四ツ塚遺跡は昭和53年山形県教育委員会発行の『山形県遺跡地図』にNo.481として登録されている。平成10年度から12年度にかけて１～３次調査が行われており、事業予定区域内の約9,500㎡が調査されている。今年度の調査区は、これらの北西部分にあたる区域である。（第１図　調査区概要図参照）

調査にあたり、本調査に先駆けて平成13年４月18日に財団法人山形県埋蔵文化財センターが試掘調査を行い、３ヵ所の試掘トレンチから、竪穴住居跡や土坑などの遺構を検出した。これらの結果及び第１～３次調査の成果をもとに、関係機関による協議を行い、調査区を設定した。調査期間は５月14日から６月15日である。発掘調査に至るまでの協議等は以下の通りである。

山形県教育委員会と県埋蔵文化財センターで、埋蔵文化財発掘調査計画について協議。

第１次調査　平成10年１月23日　第２次調査　平成11年１月27日

第３次調査　平成12月１月20日　第４次調査　平成12年11月10日

県健康福祉部長より県埋蔵文化財センター理事長あてに、「県救護施設みやま荘改築整備事業に伴う地区内の埋蔵文化財調査」の依頼。

第１次調査　平成10年３月12日　第２次調査　平成11年３月17日

第３次調査　平成12年３月１日　第４次調査　平成13年３月26日

県健康福祉部長と県埋蔵文化財センター理事長の間で「埋蔵物発掘調査業務の委託契約」を締結。

第１次調査　平成10年４月１日　第２次調査　平成11年４月１日

第３次調査　平成12年４月１日　第４次調査　平成13年４月１日

つぎにこれまでの３次にわたる調査の概要を記す。

第１次調査

調査期間　平成10年５月11日～７月８日　　調査面積　3,900㎡

第２次調査

調査期間　平成11年８月30日～11月５日　　調査面積　3,600㎡

第３次調査

調査期間　平成12年６月26日～７月５日・10月４日～11月２日　　調査面積　2,000㎡

これらの発掘調査については、整理作業を終えており、調査成果を記した報告書(1)は既に刊行されている。今回の４次調査で山形県立救護施設みやま荘改築整備事業に伴う緊急発掘調査はすべて終了することになる。

2　調査の経過と方法

平成13年４月24日、県救護施設みやま荘会議室において、四ツ塚遺跡第４次発掘調査事前打ち合わせ会を開催し、発掘調査に至る経過報告・調査機関・調査体制・調査の方法・安全対策等を確認した。以下に大まかな作業工程を列記する。

平成13年５月14日現地調査を開始。５月15日から同23日まで重機による表土除去を行った。これに併行して遺構検出を行い、さらにグリッド設定などの作業を行った。

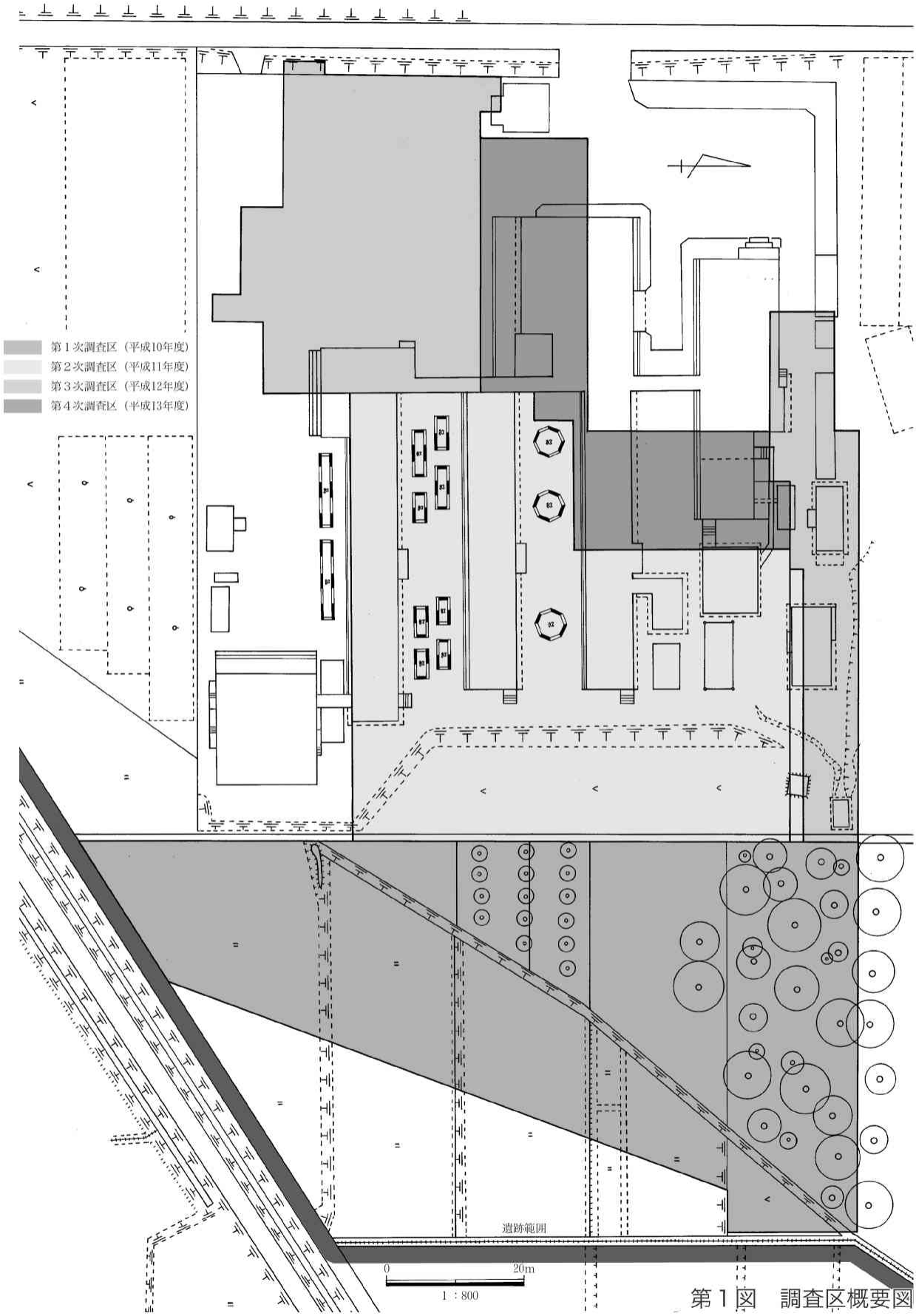
これまで行われた１次から３次の調査では、それぞれ任意の方向軸でグリッドを設定しているが、４次調査では、遺跡の位置の記録、各次の調査区の位置関係などを正確に把握するため、平面直角座標系第Ｘ系のＸ軸・Ｙ軸に沿った方向でグリッドを設定した。グリッドの間隔は２ｍとした。また、付図に収録した１次から４次までの調査区を併せた遺構配置図には、４次の調査で使用した座標値を記した。

グリッドの名称とした数字は、西から東へ大きくなる数字と南から北へ大きくなる数字を、それぞれ座標値のＹ軸とＸ軸に沿わせた。その数字の組合せを、Ｘ軸とＹ軸の交点の第１象眼となる２ｍ方眼のグリッド名とした。ただし、このグリッド名は４次調査にのみ適用される。

調査区は、旧みやま荘建設時の基礎工事のため、多くの部分が撹乱を受けていた。また、その旧みやま荘を解体する工事の際にも遺跡はさらに撹乱され、その面積の約54％が調査できない状態にあった。数ヶ所撹乱を取り除いたが、遺存している遺構は確認できなかった。撹乱は深く、また面積も大きいため、すべてを取り除くことは行わなかった。調査面積は1,500㎡である。

その後、遺構検出、遺構精査、そして図面作成、写真撮影などの記録作業を進め、６月12日ラジコンヘリを用いた業務委託による空中写真撮影を行った。遺物の取り上げは、遺構から出土したものは遺構とグリッドと層位により、遺構外から出土したものはグリッドと層位で出土地点の記録を行った。６月14日には関係者を対象に発掘調査説明会を開催し、６月15日に予定通り調査を終了した。

作業風景　南から


第１次調査区（平成10年度）
第２次調査区（平成11年度）
第３次調査区（平成12年度）
第４次調査区（平成13年度）
遺跡範囲
0
20m
1：800

第１図　調査区概要図

Ⅱ　遺跡の立地と環境

1　地理的環境

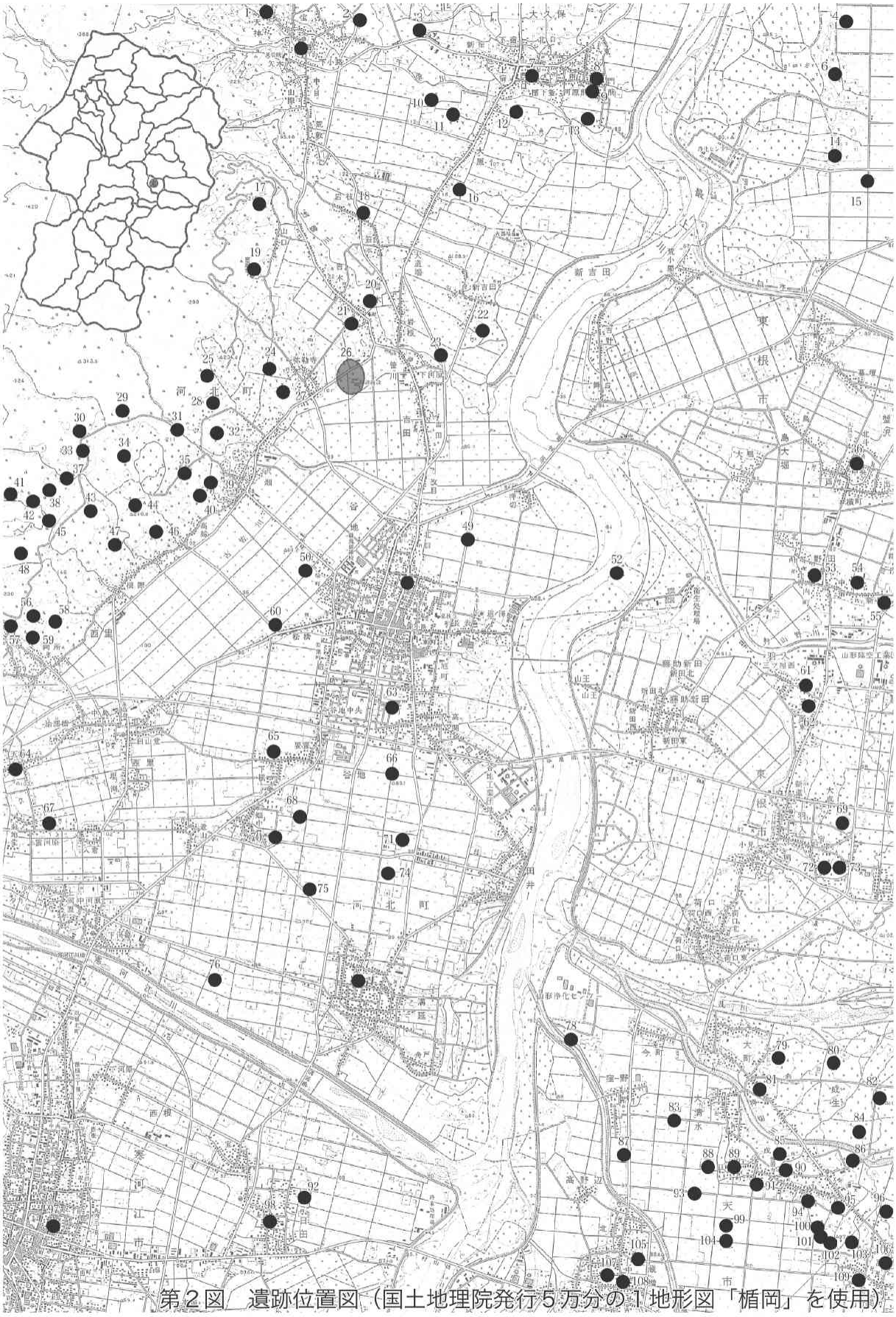
四ツ塚遺跡の所在している河北町は、山形県の中央、山形盆地の北西部に位置し、東は天童市・東根市、北は村山市、西と南は寒河江市に接している。

河北町の北西に位置する葉山火山の南東方を流下する水系には、法師川・滝ノ沢川・古佐川があり、耕地を潤しながら最上川に合流する。また、寒河江川が町の南縁を区切って西から東に流れ最上川に注ぎ、その最上川は東縁を区切って南から北に流れている。町の西側にある葉山山地の南東斜面（大久保段丘）が、南部でおおよそ100mから、北へ120m～130mの等高線を形成し、山地と平野部を区分する。平野部は、大半が寒河江川扇状地で、その東側には最上川の自然堤防や後背湿地、旧河道が、北東部には寒河江川扇状地前縁部が広がる。本遺跡は寒河江川扇状地前縁部と葉山南麓山地から続く大久保段丘の境界に位置している。この遺跡の多様な性格も異なる地形分類の境界に位置することに起因するものと考えられる。

2　歴史的環境

旧石器時代のものとしては、法師森・奥土入・根際山神などの遺跡がある。縄文時代の

番号	遺跡名	種別	時代
1	中山	集落跡	縄文
2	中村Ａ	集落跡	縄文
3	中山Ｂ	集落跡	縄文
4	河島八反	散布地	平安
5	湯野沢館	城館跡	中世
6	八反	集落跡	平安
7	大久保城	城館跡	中世
8	宝鏡寺	集落跡	縄文
9	大久保古城	城館跡	中世
10	高崖	集落跡	縄文
11	西浦	集落跡	奈良
12	赤坂	集落跡	奈良
13	市の町	集落跡	平安
14	長瀞本楯館	城館跡	中世
15	月山堂	集落跡	平安
16	狼沢	集落跡	縄文
17	岩木	散布地	縄文
18	笹本	包含地	縄文
19	岩木観音	包含地	縄文
20	岩木Ｂ	包含地	縄文
21	岩木Ａ	包含地	縄文
22	伊達城	城館跡	中世
23	花ノ木	集落跡	縄文・弥生 平安
24	弥勒堂	包含地	平安
25	山の神	包含地	縄文
26	**四ツ塚**	**集落跡**	**縄文・奈良 平安・中世**
27	弥勒寺経塚	経塚	室町
28	焼林	包含地	縄文
29	長慶寺原	包含地	縄文・平安
30	樽久保Ａ	散布地	縄文・平安
31	定林寺跡	寺院跡	中世・近世
32	法師森	包含地	旧石器・弥生
33	樽久保Ｂ	散布地	縄文
34	鶴狭間	包含地	縄文
35	慶光寺下	包含地	縄文
36	蟹沢楯	城館跡	中世
37	土入Ａ	散布地	平安
38	土入Ｂ	散布地	縄文・平安
39	お月山	集落跡	縄文
40	桑ヶ原	包含地	縄文
41	曲沢	包含地	縄文
42	奥土入	包含地	旧石器・縄文
43	根際山神	集落跡	旧石器・縄文
44	慶光寺山Ａ	集落跡	縄文
45	中土入	集落跡	縄文
46	毘沙門山	集落跡	縄文・奈良 平安
47	根際山楯	城館跡	中世
48	さいかちだ	集落跡	縄文
49	大塚館	城館跡	中世
50	所岡	包含地	平安
51	谷地城	城館跡	中世
52	堀口館	城館跡	中世
53	野田蕨手刀 出土地Ⅱ	包含地	奈良・平安
54	野田中島	集落跡	縄文・平安
55	野田蕨手刀 出土地Ⅰ	包含地	奈良・平安
56	和楯山楯	城館跡	中世
57	両所Ｂ	散布地	縄文
58	裏田	包含地	縄文・平安
59	権現森	包含地	縄文・平安
60	若宮八幡	集落跡	奈良・平安
61	三ツ屋	集落跡	縄文・平安
62	三ツ屋東	集落跡	縄文
63	荒町	包含地	平安
64	境介次郎屋敷	城館跡	中世
65	下槇	包含地	古墳
66	月山堂	集落跡	平安
67	小泉楯	城館跡	中世
68	畑中Ｂ	包含地	平安
69	羽入熊野堂	集落跡	平安
70	畑中Ａ	包含地	平安
71	馬場	集落跡	古墳・奈良 平安
72	羽入楯	城館跡	中世
73	羽入山森	集落跡	縄文・平安
74	熊野台	包含地	古墳・奈良 平安
75	一ノ坪	集落跡	古墳・奈良 平安
76	不動木	集落跡	奈良・平安
77	溝延城	城館跡	中世
78	今町経壇	納経	江戸
79	二階堂氏屋敷	城館跡	鎌倉
80	後藤原	集落跡	縄文
81	高野坊	寺院跡	鎌倉～室町
82	瓜小屋	集落跡	縄文
83	一楽壇	墳墓	室町
84	熊野堂前	集落跡	縄文
85	成生館	城館跡	南北朝～ 安土桃山
86	金谷	製鉄	縄文・鎌倉
87	蔵増北Ｂ	集落跡	平安
88	的場	集落跡	平安
89	成生薬師神社 一字一石経壇塔	納経	江戸
90	成生古墳群	古墳群	古墳
91	成生古銭出土地	古銭 出土地	室町
92	新田楯	城館跡	中世
93	三条条里	条里	奈良・平安
94	地蔵池Ｂ	集落跡	平安
95	地蔵池Ａ	集落跡	縄文～弥生
96	高木石鳥居跡	鳥居跡	室町
97	寒河江城	城館跡	中世
98	日田城の内	城館跡	中世
99	清池清水	集落跡	古墳
100	高木古銭出土地	古銭 出土地	室町
101	高木石田墳墓	墳墓	南北朝
102	高木石田	集落跡	縄文・平安
103	高木原口	集落跡	古墳・平安
104	八反記田	集落跡	縄文
105	蔵増北Ａ	集落跡	鎌倉
106	北畑	集落跡	平安
107	蔵増城	城館跡	室町～江戸
108	菩願寺護念経碑	納経	江戸
109	高木館	城館跡	室町～ 安土桃山



第２図　遺跡位置図（国土地理院発行５万分の１地形図「楯岡」を使用）

遺跡は、前期は後沢・長慶寺原・奥土入、中期はお月山・慶光寺Ａ・権現森など、後期は奥土入・長慶寺原、晩期は花ノ木[2]などがある。いずれも集落跡で、そのほとんどが平野部に臨む丘陵地と中小河川の河成段丘に位置している。弥生時代の遺物としては、花ノ木遺跡から弥生土器・石刀・石包丁・扁平片刃石斧などが出土している。

古墳時代以降の遺跡の多くは、平野部に広がっている。古墳時代の遺跡は、下槙[3]・熊野台[4]などがあり、奈良時代、平安時代の集落跡が熊野台・一の坪[5]・不動木[6]・月山堂[7]・馬場[8]・花ノ木等から発見されている。熊野台遺跡からは「大刀自」の箆書きのある須恵器の大甕が出土している。『延喜式』造酒司の項にある祭神九座の内に、「大邑の刀自」の記載があり、『小右記』永祚元年（989年）の項にも「大刀自、小刀自各一甑を献ずる」といった内容があることから、酒造用の壺と考えられている。[9]

一の坪遺跡からは「大山」、また「大山□（郷ヵ）」と墨書した須恵器坏が出土している。大山郷は古代律令制における出羽国最上郡の管下であったが、仁和２年（886年）11月に最上郡から分置された新設の郡である村山郡管下の六郷の一つとなった。『三代実録』には仁和３年（887年）５月に出羽守である坂上茂樹が、出羽郡井口地にあった国府を、最上郡大山郷保宝志野に移したいと、中央政府に申請したと記されている。この申請は許可されなかったが、移転先の候補地となる大山郷の所在地については、以前から問題とされてきており、一の坪遺跡出土の墨書土器は問題解決の糸口となる重要な遺物である。大山郷の候補地とされる一の坪遺跡のある河北町は、申請時には、既に分置された村山郡に含まれると考えられる。しかし、村山郡が分置された後の最上郡には大山郷は存在しないことから、記事の前後関係に問題は残るが、移転申請のあった大山郷は旧最上郡管下の大山郷と考えても良いだろう。

東村山郡山辺町南部で検出された条里遺構は奈良時代に営まれたものと報告[10]されている。一方、河北町とは最上川を挟んで対岸に位置する東根市の北西部から村山市南部の一帯にかけても条里遺構が認められる。調査[11]によれば、平安時代の水路・畦畔が検出されている。新設された村山郡の郡衙は東根市郡山付近に推定されているが、この郡衙を中心とした山形盆地北部での条里制の施行と村山郡の分置は密接に関連し、条里水田の完成を前提として計画された可能性が強いと考えられている。[12]村山郡管下となった河北町の谷地・溝延の水田面に、広範な条里遺構の分布が確認されることも、この一連の動きの中で理解して良いだろう。

この河北町を含む西村山郡において、奈良時代から平安時代かけて営まれた窯跡としては、寒河江市の平野山古窯跡群[13]が挙げられる。河北町に隣接する寒河江市の西部丘陵に位置する平野山には、14ヶ所の窯跡や須恵器ないし瓦の散布地が確認されている。特に出土した瓦については、酒田市所在の国指定史跡で出羽国府とされる城輪柵跡に供給されたとする説があるが、賛否両論あり、未だに解決されていない。また、奈良時代から平安時代にかけて継続して営まれた窯跡として大量の須恵器が出土しており、四ツ塚遺跡で出土する須恵器もこの地で製作された可能性がある。

Ⅲ　遺跡の概観

１　基本層序

四ツ塚遺跡の第４次調査の調査区は、遺跡範囲の北東部分である。遺跡の北東方向にある葉山山地から根際丘陵を経て、大久保段丘に至る緩い傾斜面に位置する。遺跡の中では最も標高の高い地点である。遺跡範囲の大半は現在は果樹園や畑地として利用されている。１次調査の北東部及び２次調査と３次調査の調査区はやはり大久保段丘上に位置しているが、１次調査の南西部は寒河江川扇状地の前縁部に位置し、周辺は水田として利用されている。最も標高の低い１次調査区では、地下水位が高いため井戸跡が比較的多くみられるが、逆に今回の４次調査区では標高が高いこと、遺跡の北約200mには縄文時代中期の岩木Ａ遺跡が存在することなどから縄文時代の遺構・遺物も期待された。

基本層序は第３図に示した。調査区の西辺、南辺は既に工事により調査区内より低くなっている。北辺の遺構検出面から上はすべて盛土である。基本層序は南辺から２ヶ所記録した。

ａ－ａ′の１層は撹乱で旧みやま荘解体時のコンクリートなどを多量に含んでいた。２層はコンクリートなどは見られなかったが、土が撹拌されており、おそらく旧みやま荘建設時の整地等によるものと考えられる。３層以下が地山として認識した層である。遺構検出も１・２層を取り除いて、３層上面で行った。３層から10層は粘土質の土、以下が砂質の土である。地形の傾斜に沿うように北から南へ傾斜して堆積しており、二次的な移動によるものと判断できる。

ｂ－ｂ′の１層もやはり撹乱である。２層は均質な黒褐色シルトだが、特に遺物は包含していない。３層以下を地山とし、遺構検出も３層上面で行った。３層・４層の堆積状況は水平に近くなってきており、地形の傾斜が緩くなっていることを示している。

２　遺構と遺物の分布

遺構・遺物とも１次調査区が最も豊富であり、次数を追うごとに減少している。１次調査区の段丘の縁辺部には遺構が多くみられ、その遺構群は西へと続くものと予想された。しかし、本来は西へ向かって標高が上がっていく地形を削平して平坦面を造成し、旧みやま荘を建設したため、遺構は西へ行くほど希薄になる。遺物も同様で、４次にわたる調査で出土した遺物の総量は整理箱で26箱である。

４次調査では竪穴住居跡、竪穴状遺構、掘立柱建物跡、溝跡、陥穴、土坑、ピットが検出された。特に溝跡ＳＤ７は２次調査区の溝跡ＳＤ123と３次調査区のＳＤ98を繋ぐものである。遺物はほとんどが竪穴住居跡と竪穴状遺構から出土した奈良時代から平安時代の須恵器・土師器である。縄文時代のものと考えられる石器も若干出土したが、縄文時代の遺構に伴うものではなく、古代の遺構の覆土に混じったものと、撹乱から出土したものであった。

第３図　第４次調査区遺構実測図・基本層序柱状図

Ⅳ　遺構

１　竪穴住居跡

ＳＴ１（第４図）

41－30グリッド付近に位置する。東西3.8m、南側を大きく撹乱されており、南北の現存長は1.4mである。カマドと煙道は北壁中央部に設けられている。煙道も削平を受け、全長は不明だが現存長で0.6m残る。柱穴など、他の施設は見られなかった。主軸方向はＮ７°Ｗ（北で西に７°振れる、以下このように略す）である。図示した平面図は床面上での検出状況である。断面図からは、竪穴の掘形は、壁際が一段深く、17～22層を埋め土としている状況が確認できる。その上に16層の貼床土が見られる。

カマドは11～15層で構築される。内部は長軸70cm、短軸60cmの範囲で被熱している。カマド中央には石製の支脚28が据え付けられており、やはり周囲を強く被熱している。

出土した遺物は少ないが、床面からは長胴甕18・19・22が出土した。他にカマド周辺で30・31・32などの擦痕をもつ石器が出土している。

ＳＴ２（第５図）

45－32グリッド付近に位置する。遺存していた部分の現存長は東西3.5m、南北0.8mのみである。重複する柱穴ＳＰ52より新しい。カマドは南壁の西よりに設けられている。他の施設は確認できなかった。主軸方向はN15°Wである。１～５層はＳＴ２を切る遺構、竪穴の西半分は地山上を床とし、地形の低い東半部に貼床土12・13層が見られた。12層はカマドが上に構築されていたため被熱している。

カマドは９～11層で構築され、内部は直径40cmの範囲で被熱している。

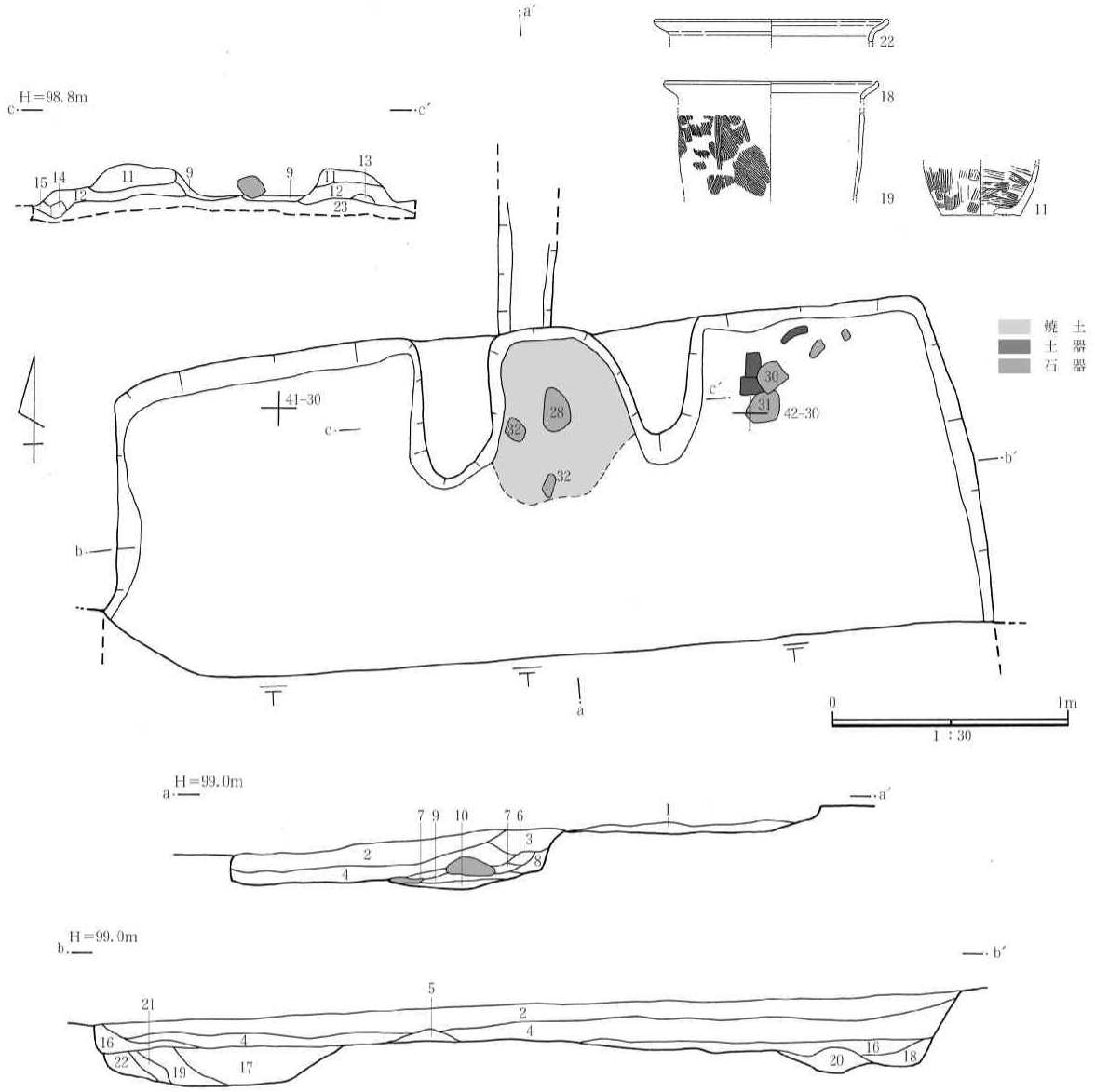
遺物は底部切離し技法が回転ヘラ切り技法の須恵器坏、土師器甕を中心に出土した。他にカマドの構築材とも考えられる擦痕をもつ石製品29がカマド周辺から出土した。床面からは須恵器甕８・土師器甕17が出土した。

２　竪穴状遺構

ＳＴ６（第６図）

竪穴住居跡とは異なり、カマドなどの施設を持たず、住居とは考えられないものを竪穴状遺構とした。今回の調査ではＳＴ６の１基のみ検出した。44－30グリッド付近に位置する。南北2.1m、東西2.2mの隅丸方形を呈する。主軸方向はN18°Wである。内部にカマドや柱穴などの施設は持たない。１～５層が覆土で、６層の平坦な面が貼床土と考えられる。平面図では床面上の検出状況を図示した。

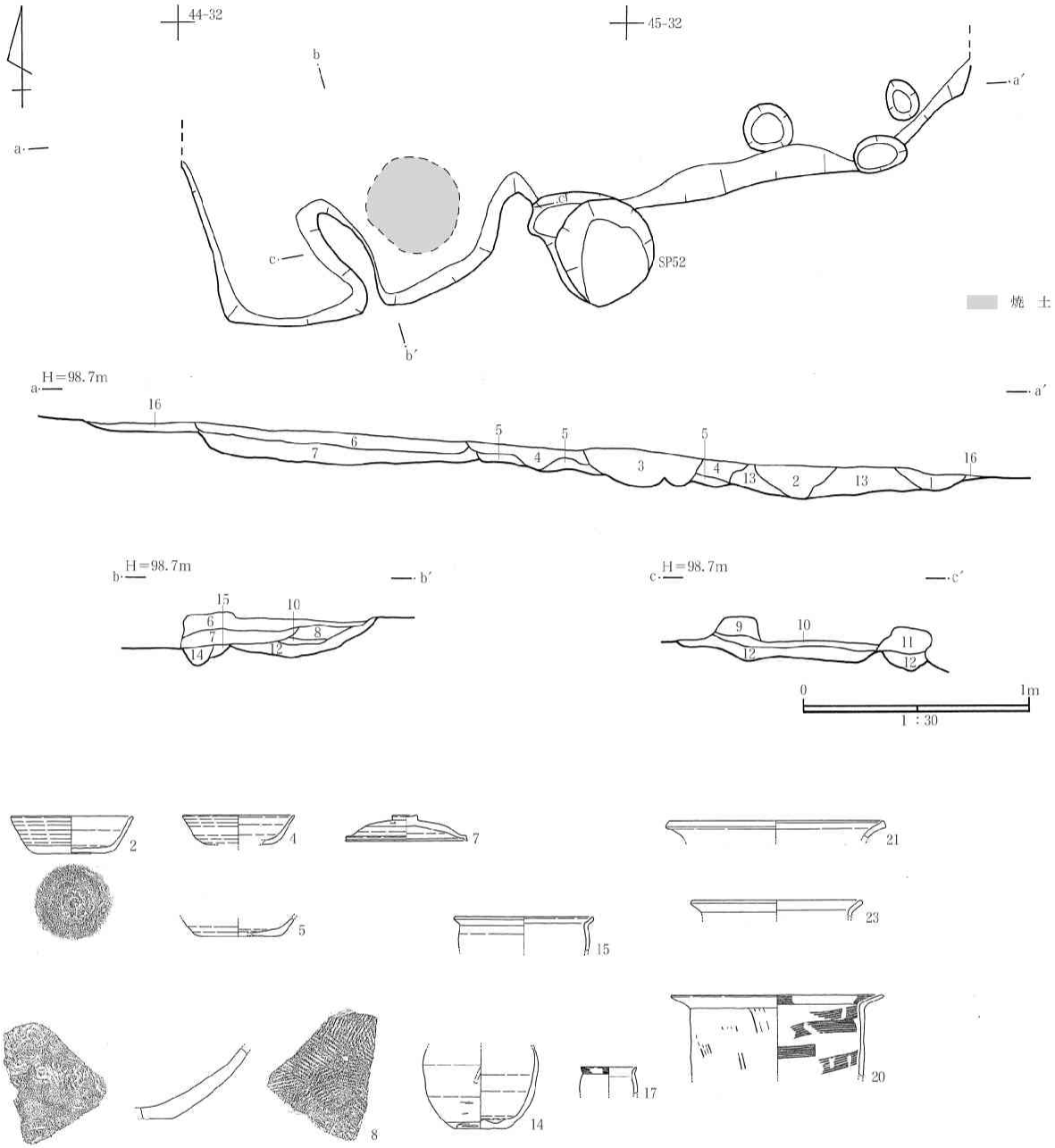
遺物は、底部切離し技法が回転ヘラ切り技法による須恵器の坏・高台付坏などが出土し、特に須恵器坏３は床面から出土している。他に土師器甕などが出土した。



ＳＴ１

1	10YR3/2 黒褐	シルト	炭化物を含む	煙道
2	10YR2/2 黒褐	シルト		覆土
3	10YR4/4 褐	シルト	10YR 2/2黒褐シルトを含む	カマド崩落土
4	10YR2/3 黒褐	シルト		覆土
5	10YR5/4 にぶい黄褐	粘質シルト		カマド崩落土
6	10YR3/4 暗褐	シルト		
7	10YR3/3 暗褐	シルト	焼土を含む	
8	10YR3/3 暗褐	シルト	焼土を含む	
9	10YR2/3 黒褐	シルト	被熱	カマドの中の土
10	10YR3/4 暗褐	シルト	10YR 5/4にぶい黄褐シルトを含む　被熱	貼床土
11	10YR3/3 暗褐	シルト	10YR 6/4シルト粘質シルトを含む	カマド構築土
12	10YR3/4 暗褐	シルト	10YR 6/4にぶい黄橙粘質シルトを少し含む	〃
13	10YR2/2 黒褐	シルト	10YR 4/4褐シルトを少し含む	〃
14	10YR3/4 暗褐	シルト		〃
15	10YR3/3 暗褐	シルト	10YR 2/1黒シルトを少し含む	〃
16	10YR4/4 褐	粘質シルト	10YR 3/3暗褐シルトを含む	貼床土
17	10YR4/4 褐	シルト	10YR 2/2黒褐シルトを含む　礫を少し含む	埋め土
18	10YR3/4 暗褐	シルト	風化礫を少し含む	〃
19	10YR5/4 にぶい黄褐	シルト		〃
20	10YR5/4 にぶい黄褐	シルト	10YR 3/3暗褐シルトを少し含む	〃
21	10YR6/4 にぶい黄橙	粘質シルト	10YR 4/4褐シルトを少し含む	〃
22	10YR2/2 黒褐	シルト	10YR 6/4にぶい黄橙シルトを少し含む	〃
23	10YR6/4 にぶい黄橙	シルト	10YR 2/3シルトを少し含む	地山

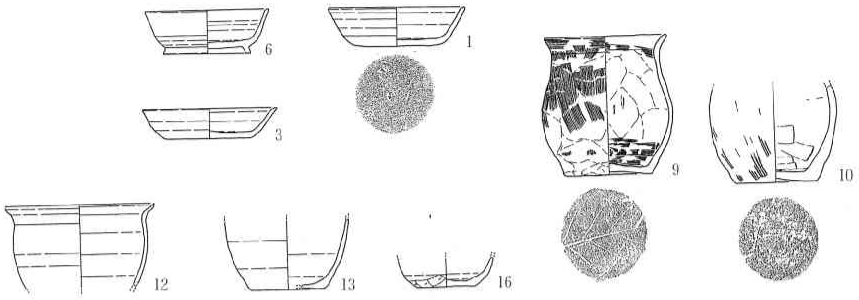
第４図　竪穴住居跡ＳＴ１

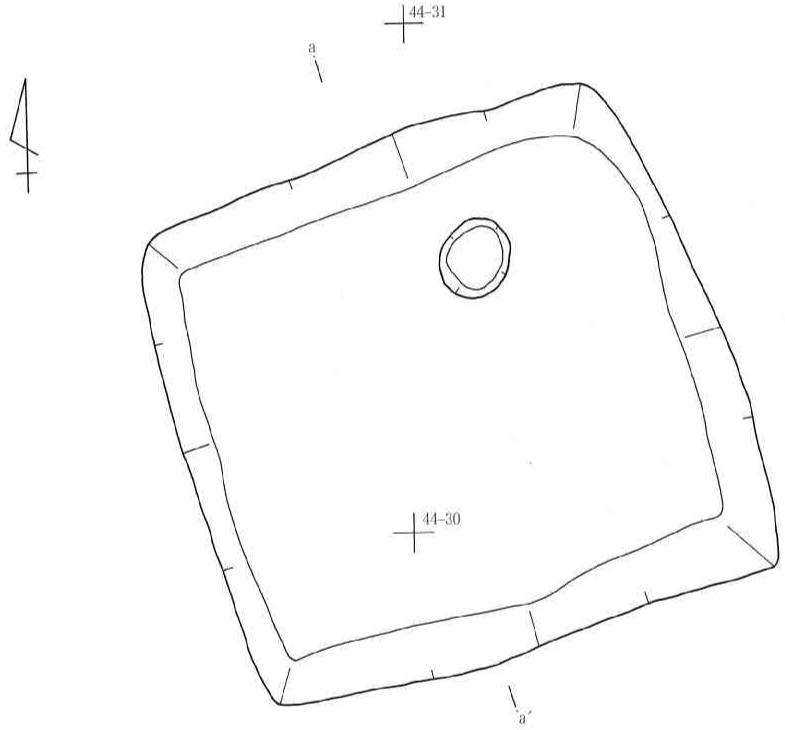


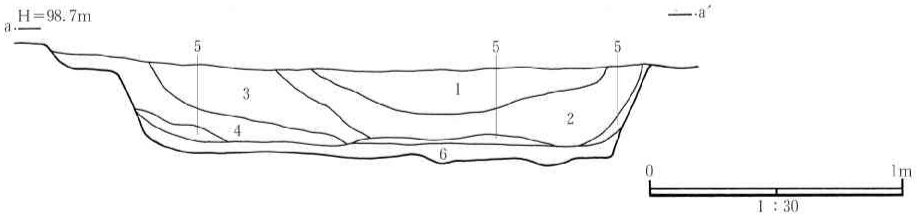
ＳＴ２

1	10YR 2/4	黒褐	シルト		ピット
2	10YR 2/2	黒褐	シルト	地山を含む	〃
3	10YR 2/2	黒褐	シルト	土器片を含む	〃
4	10YR 3/2	黒褐	シルト	荒砂を混じる	土坑
5	10YR 3/2	黒褐	シルト	荒砂・10YR 4/6 褐砂質シルト(地山土)を含む	〃
6	10YR 3/3	暗褐	シルト		覆土
7	10YR 2/2	黒褐	シルト	荒砂・風化礫を含む	〃
8	10YR 2/2	黒褐	シルト	焼土を含む	〃
9	10YR 3/3	暗褐	シルト	焼土を含む	カマド構築土
10	10YR 4/6	褐	シルト	被熱　焼土を多く含む	〃
11	10YR 3/3	暗褐	シルト	小礫を含む	〃
12	10YR 3/2	黒褐	シルト	被熱	貼床土
13	10YR 2/3	にぶい黄褐	シルト		〃
14	10YR 2/4	にぶい黄褐	シルト		
15	10YR 2/5	にぶい黄褐	砂質シルト		
16	10YR 2/6	にぶい黄褐	シルト	荒砂を含む	

第５図　竪穴住居跡ＳＴ２







ＳＴ６

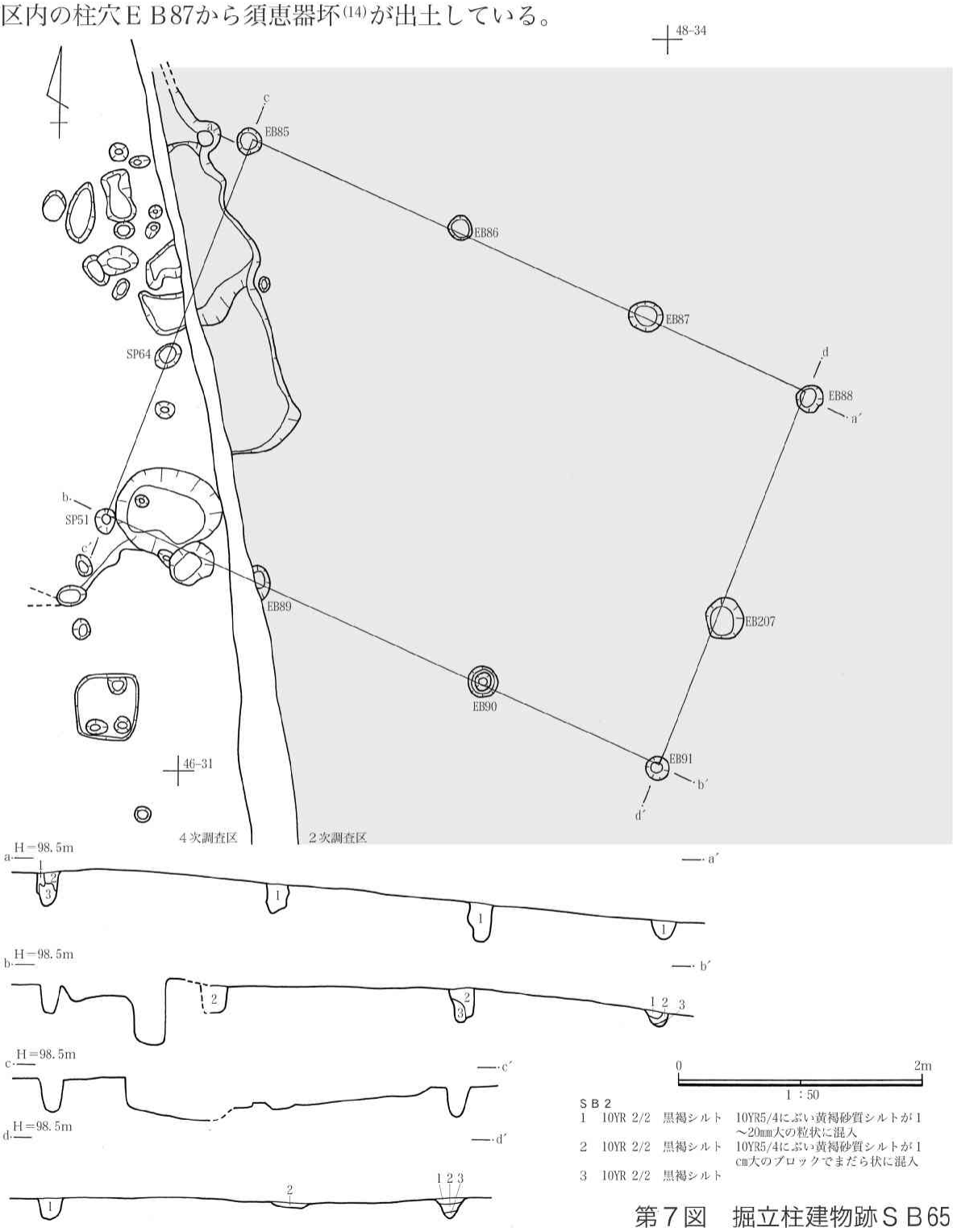
1	10YR 3/3	暗褐	シルト	風化礫少し含む	覆土
2	10YR 2/3	黒褐	シルト		〃
3	10YR 2/3	黒褐	シルト	風化礫小を多く含む	〃
4	10YR 3/4	暗褐	シルト	風化礫大を少し含む	〃
5	10YR 4/4	褐	シルト	10YR 2/3 黒褐シルトを少し含む	〃
6	10YR 4/6	褐	砂	風化礫・10YR 2/1 黒シルトを含む	貼床土

第６図　竪穴状遺構ＳＴ６

3　掘立柱建物跡

ＳＢ65（第７図）

45－32グリッドに位置する。４次調査区内では柱穴ＳＰ51・64の２基が検出され、２次調査区内のＳＢ２の柱穴と組む。梁間２間、桁行３間の掘立柱建物跡である。主軸方位はN64°Ｗである。直径21～34cmの柱穴からなる。底面の標高は97.8～98.15mである。遺物は２次調査区内の柱穴ＥＢ87から須恵器坏(14)が出土している。



第７図　掘立柱建物跡ＳＢ65

３　溝跡

ＳＤ７・９・ＳＫ39（第８図）

28－19～33－20グリッドに位置する。幅100～135㎝の東西から南北方向に屈曲する溝跡である。ＳＤ７は、東側の２次調査区のＳＤ123と、南側に隣接する３次調査区のＳＤ98と繋がることが確認され、同一の溝跡であることが分った。（第23図　四ツ塚遺跡遺構配置図参照）

ＳＤ９は２次調査区のＳＤ362と同一のものと見られるが、４次調査区の中に溝の端があり、ＳＤ７のように３次調査区には続かない。両者は重複しているが、ＳＤ９が古く、ＳＤ７が新しいことが、断面図ｅ－ｅ′で確認された。

また、ＳＫ39もＳＤ７に切られている。ＳＫ39は南北130㎝、東西60㎝の土坑である。

ＳＤ７・９とも覆土は水成堆積ではなく、周辺の地山土を含みながら堆積した黒褐、暗褐のシルトが主体である。

出土した遺物は少なく、ＳＤ７・ＳＫ39から土師器片が数点のみで、ＳＤ９からは出土していない。

ＳＤ11（第９図）

25－24～30－21グリッドに位置する。幅40～65㎝の溝跡である。撹乱により分断されており、部分的に検出された。主軸の方位はＮ65°Ｗである。溝跡の底面は周辺の地形の通りに、北西から南東に向かって下がっている。他年度の調査区にＳＤ11と繋がる遺構は見られない。出土遺物は無い。

４　陥穴（第10図）

陥穴は３基検出された。張り出した段丘の形、等高線に沿うように並んで配置されている。ＳＫ８とＳＫ19の間では、撹乱のため検出されなかったが、ＳＫ19とＳＫ８の間隔から推察すると１基あるいは２基存在した可能性は高い。３基とも出土遺物は無い。

ＳＫ５

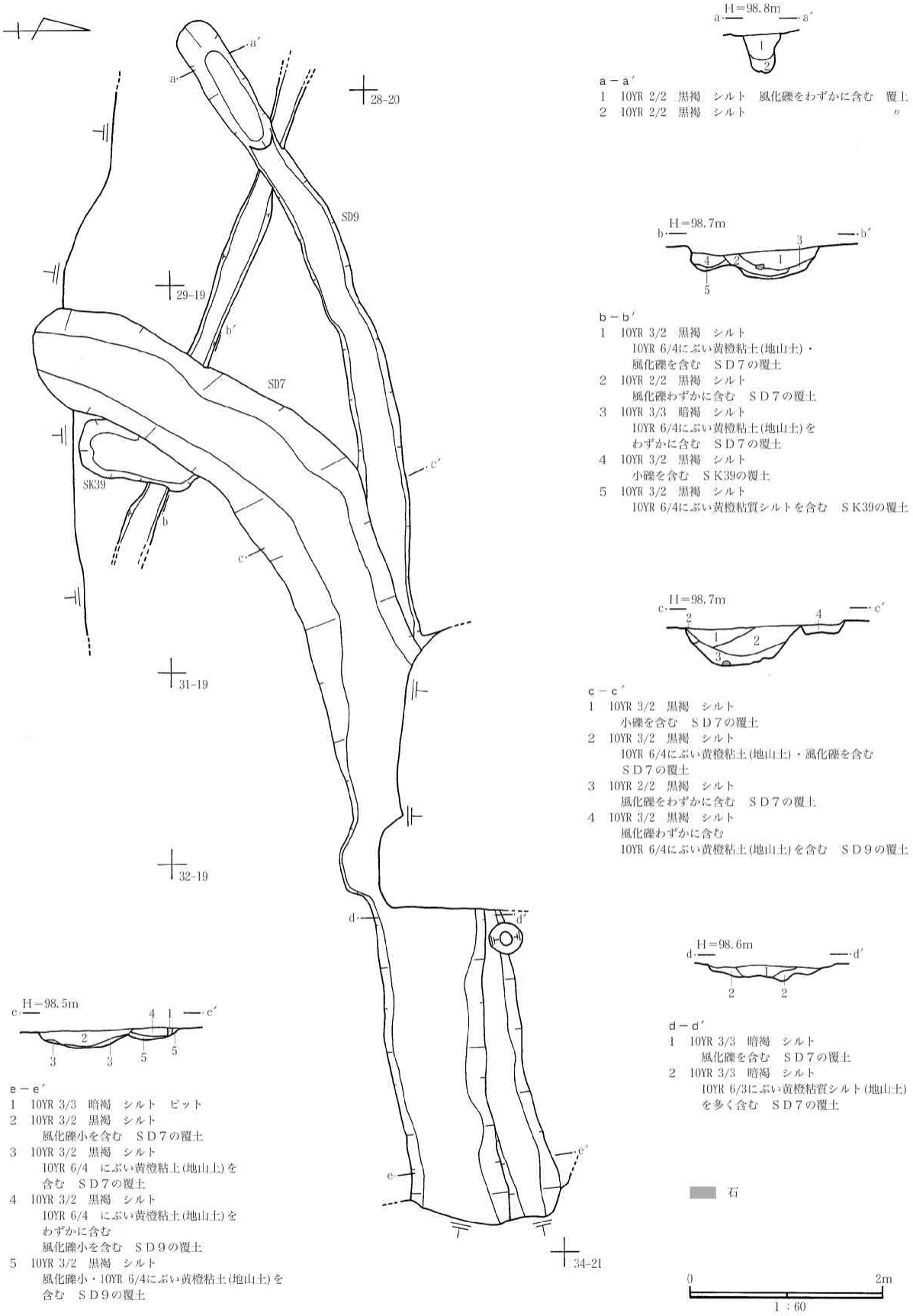
43－31グリッドに位置する。平面形はやや東西に長い円形を呈するが、断面の観察から、東側の壁の崩落によるものと考えられる。底面中央には逆茂木を立てたと考えられるピットが検出された。

ＳＫ８

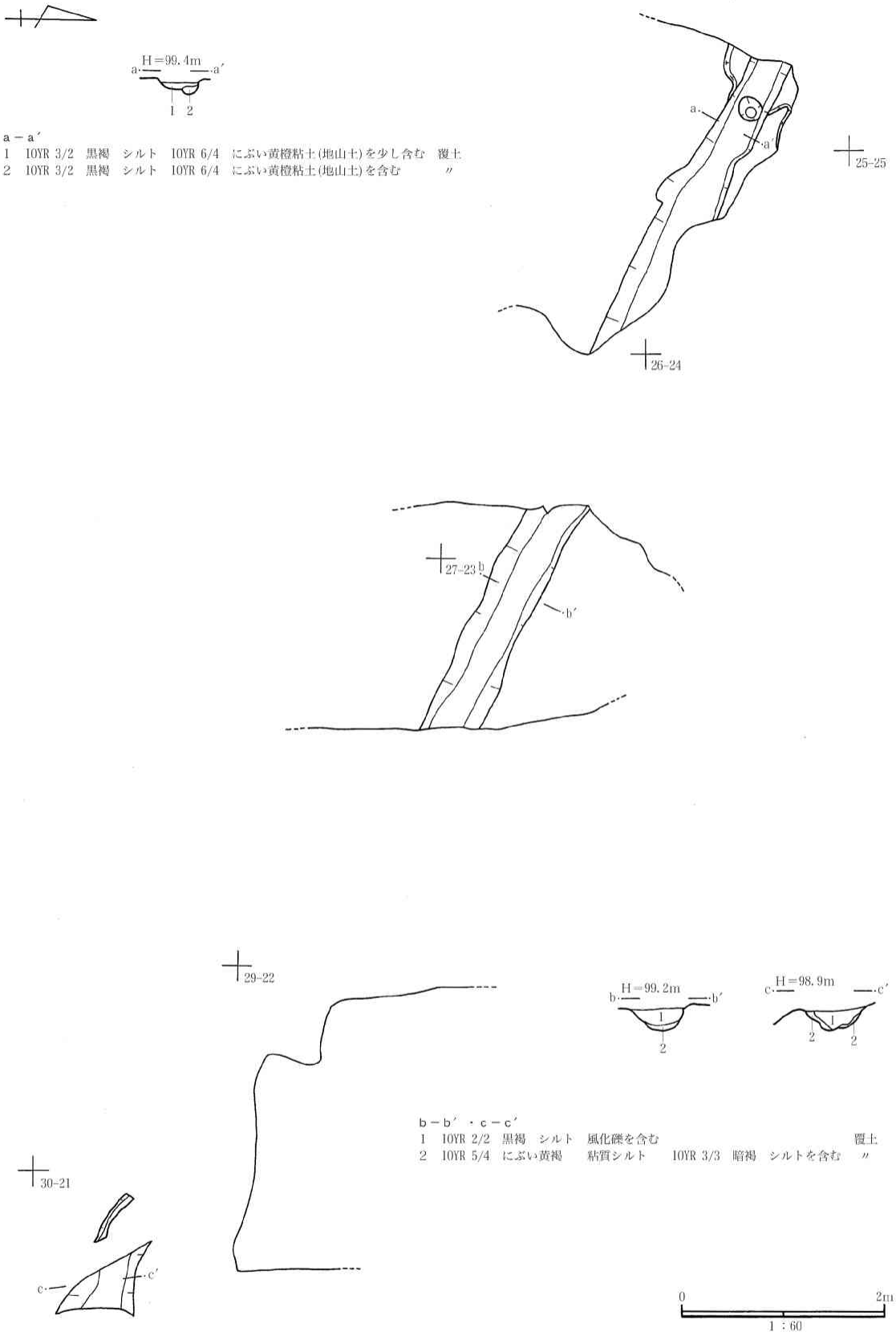
33－19グリッドに位置する。平面形は円形を呈する。底面中央には逆茂木を立てたと考えられるピットが検出された。４層は地山に似ており、壁の崩落土であろう。

ＳＫ19

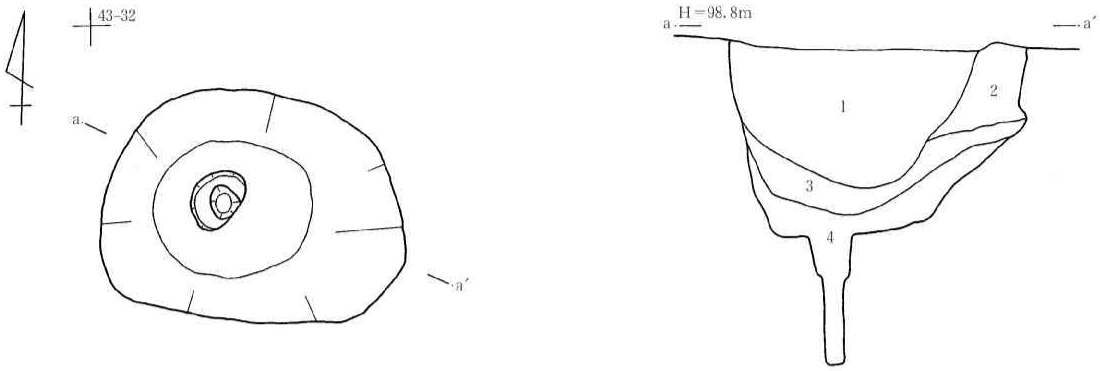
37－22グリッドに位置する。平面形は円形、底面中央に逆茂木を立てたと考えられるピットが検出された。３層が壁の崩落土である。



第８図　溝跡ＳＤ７・９、ＳＫ39

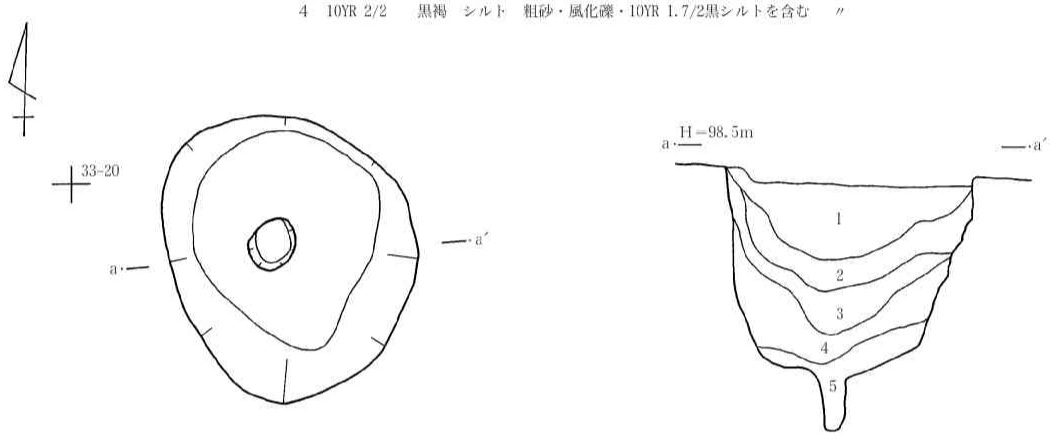

H＝99.4m
a
a′
1 2
a－a′
1 10YR 3/2 黒褐 シルト 10YR 6/4 にぶい黄橙粘土(地山土)を少し含む 覆土
2 10YR 3/2 黒褐 シルト 10YR 6/4 にぶい黄橙粘土(地山土)を含む 〃
25-25
26-24
27-23
b
b′
29-22
30-21
H＝99.2m
b
b′
1
2
H＝98.9m
c
c′
1
2 2
b－b′・c－c′
1 10YR 2/2 黒褐 シルト 風化礫を含む 覆土
2 10YR 5/4 にぶい黄褐 粘質シルト 10YR 3/3 暗褐 シルトを含む 〃
0
2m
1：60

第９図　溝跡ＳＤ11



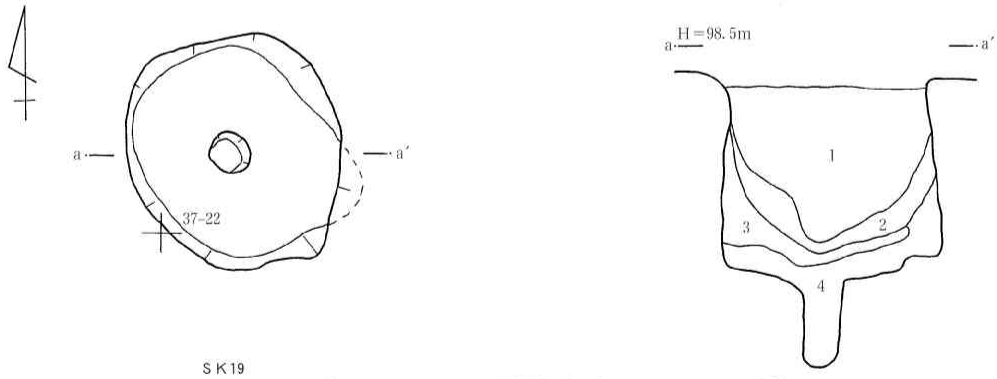
ＳＫ５

1	10YR 1.7/1	黒	シルト	粗砂・風化礫を含む	覆土
2	10YR 3/3	暗褐	シルト	粗砂・風化礫を多く含む	〃
3	10YR 3/3	暗褐	シルト	粗砂・風化礫・10YR 1.7/1黒シルトを含む	〃
4	10YR 2/2	黒褐	シルト	粗砂・風化礫・10YR 1.7/2黒シルトを含む	〃



ＳＫ８

1	10YR 1.7/1	黒	シルト	風化礫を少し含む	覆土
2	10YR 2/1	黒	シルト	風化礫を少し含む	〃
3	10YR 3/3	暗褐	シルト	10YR 6/4 にぶい黄橙粘質シルト(地山土)を含む	〃
4	10YR 5/4	にぶい黄褐	シルト	10YR 6/4 にぶい黄橙粘質シルト(地山土)を多く含む	〃
5	10YR 3/2	黒褐	粘質シルト		〃



ＳＫ19

1	10YR 1.7/1	黒	シルト	風化礫を少し含む	覆土
2	10YR 2/3	黒褐	シルト		〃
3	10YR 4/3	にぶい黄褐	粘質シルト	10YR 3/2 黒褐シルトを含む	〃
4	10YR 3/2	黒褐	シルト	10YR 3/1 黒褐シルトブロックを含む	〃

0　1m
1：30

第10図　陥穴ＳＫ５・８・19

5　その他の遺構（第11図）

ＳＫ４・ＳＰ50

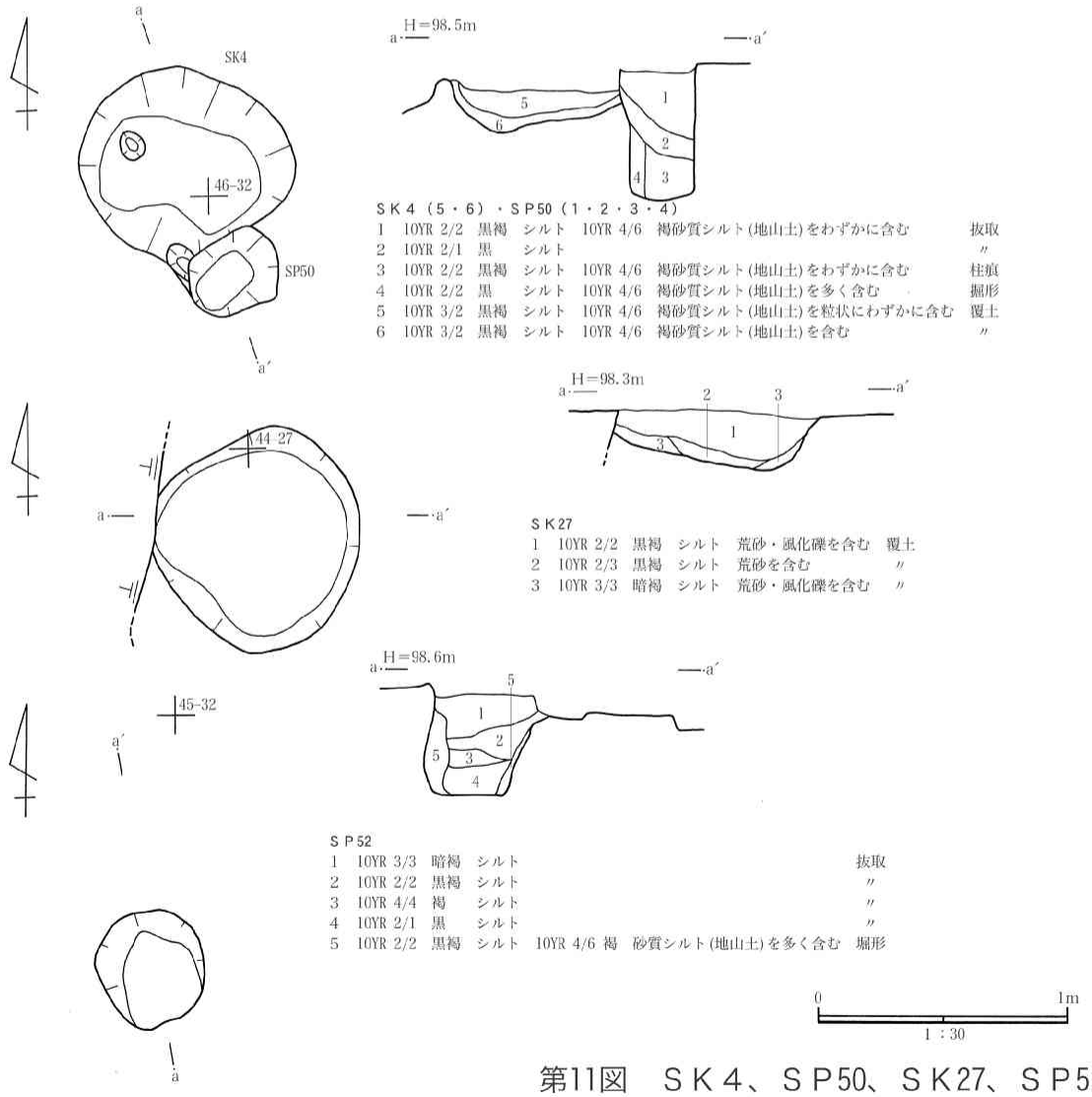
ＳＫ４とＳＰ50が重複している。切り合い関係ではＳＫ４が古い。ＳＫ４は直径90㎝、深さ18㎝の円形の浅い土坑である。ＳＰ50は直径40㎝、底面の標高が98.14m。断面から柱穴であると判断される。組み合う柱穴はＳＰ52が考えられるが、他にはなく２基のみであり、どのような建物を構成するか不明である。両者とも出土遺物は無い。

ＳＫ27

直径90㎝、深さ22㎝の浅い土坑である。出土遺物は無く、性格・時期とも不明であるが、形状はＳＫ４と同様であり、関連する遺構であろう。

ＳＰ52

直径47㎝、底面の標高が98.1mの柱穴である。ＳＴ２と重複しているが、ＳＰ52が古い。形状、底面の標高から、ＳＰ50と組み合うものと考えられる。ＳＰ52とＳＰ50の間隔は心々で2.2mである。



第11図　ＳＫ４、ＳＰ50、ＳＫ27、ＳＰ52

Ⅴ　遺物

今年度の四ツ塚遺跡第４次調査で出土した遺物は、整理箱で５箱である。ほとんどが竪穴住居跡ＳＴ２と竪穴状遺構ＳＴ６に伴う遺物であり、その他の地点から出土しているものはごく僅かである。調査区面積の54.1%が撹乱されていることもあり、全体の遺物点数は非常に少ない。出土遺物の主体は須恵器・土師器などの土器である。

１　須恵器（第12図）

今回出土した須恵器には、坏・高台付坏・蓋・甕などがある。１・３・６が竪穴状遺構ＳＴ６の覆土中から、２・４・５・７・８が竪穴住居跡ＳＴ２から出土している。

坏は破片を含め、９点出土しており、このうち１～５の５点について図化した。底部の切り離し技法は、底部の確認できる４点すべて回転ヘラ切り技法によるものである。切り離し後の底部にはナデ調整を施している。１は、底径が大きく、逆台形を呈する。２は、ロクロ目が強く残るが、底部周縁の調整などを含め１に近い形状である。３は焼成が悪く、内面、外面ともに表面が剥離している。二次的に被熱している可能性がある。４は立ち上がり付近から口縁部にかけての破片で、底部を欠く。５は底部から立ち上がり部分にかけての破片である。底部切り離し技法は回転ヘラ切り技法である。底部の切り離し後は他と同様にナデ調整が施されていると考えられる。

高台付坏６はＳＴ６から出土している。底部切り離し技法は回転ヘラ切り技法で、底径が大きく、逆台形を呈する。法量がやや小さいものの、１に近い形状を持つ。

蓋は７がＳＴ２から出土している。天井部周縁に回転ヘラ削りが施される。器高がやや高く、天井部と体部の境が不明瞭で口縁部端が屈曲する。

甕は８がＳＴ２から出土している。底部から体部にかけての破片で、外面に平行タタキ、内面に同心円状の打圧調整痕がみられる。本来は丸底の甕であったと考えられる。

２　土師器（第12・13図）

土師器は、ロクロ成形のものと非ロクロ成形のものがある。県内では須恵器の製作技法の系譜を引く、ロクロ成形の土師器を「赤焼土器」「赤焼き土器」「あかやき土器」などとして区別することが多いが、本報告においては、これらの土器を土師器の一類型とし、遺物観察表の備考欄に「赤焼土器」と表記する。

土師器は甕・坏などの器種が出土している。土師器は比較的出土量が多く、４次調査の出土遺物の主体をなす。溝跡・土坑などからの出土も見られるが、主に竪穴住居跡ＳＴ１・２、竪穴状遺構ＳＴ６から出土している。

甕は煮炊具と考えられる小型甕や長胴甕が多く、大型の甕の破片も１点出土している。小型甕は非ロクロ成形のものを３点、ロクロ成形のものを６点図化した。非ロクロ成形のものは９～11で、９・10は竪穴状遺構ＳＴ６から、11は竪穴住居跡ＳＴ１から出土した。９以

外は下半部の破片のため、全体を知ることができないが、底径や体部の立ち上がりは近似している。下半部が被熱しており、煮炊具と考えられる。９・10は底部に木葉痕が残る。11は長胴甕の破片が出土した近辺から出土しており、長胴甕の底部とも考えられる。12～17はロクロ成形で、比較的小型のものも見られる。12・13・16は竪穴状遺構ＳＴ６から、14・15・17は竪穴住居跡ＳＴ２からの出土である。12・13については同一個体の可能性がある。12～15は二次的な被熱が見られ、煮炊具と考えられる。また、14は底部に粘土紐の巻上げ痕が残る。また、底部切り離し技法はヘラ切り技法である。16もヘラ切り技法で、体部立ち上がり付近にヘラ削りが見られる。

長胴甕は、竪穴住居跡ＳＴ１・２からの出土である。全体が復元されるものはない。18～20は非ロクロ成形と考えられる。５点を図化した。18・19・22が竪穴住居跡ＳＴ１から、20・21・23が竪穴住居跡ＳＴ２から出土している。18・19は同一個体と考えられる。口縁部は上端をつまみ出す。胴部の外面には縦方向のハケメが、内面にはナデ調整が見られる。20は口縁部から胴部にかけての破片である。口縁部は薄手で、つまみ出しがない。内面は横方向のハケメで調整されているが、外面は状態が悪く、縦方向のハケメの痕跡が僅かに残るのみである。21～23は口縁部のみの破片である。21は口縁部の上下端が、22～23は口縁部の上端がつまみ出されている。

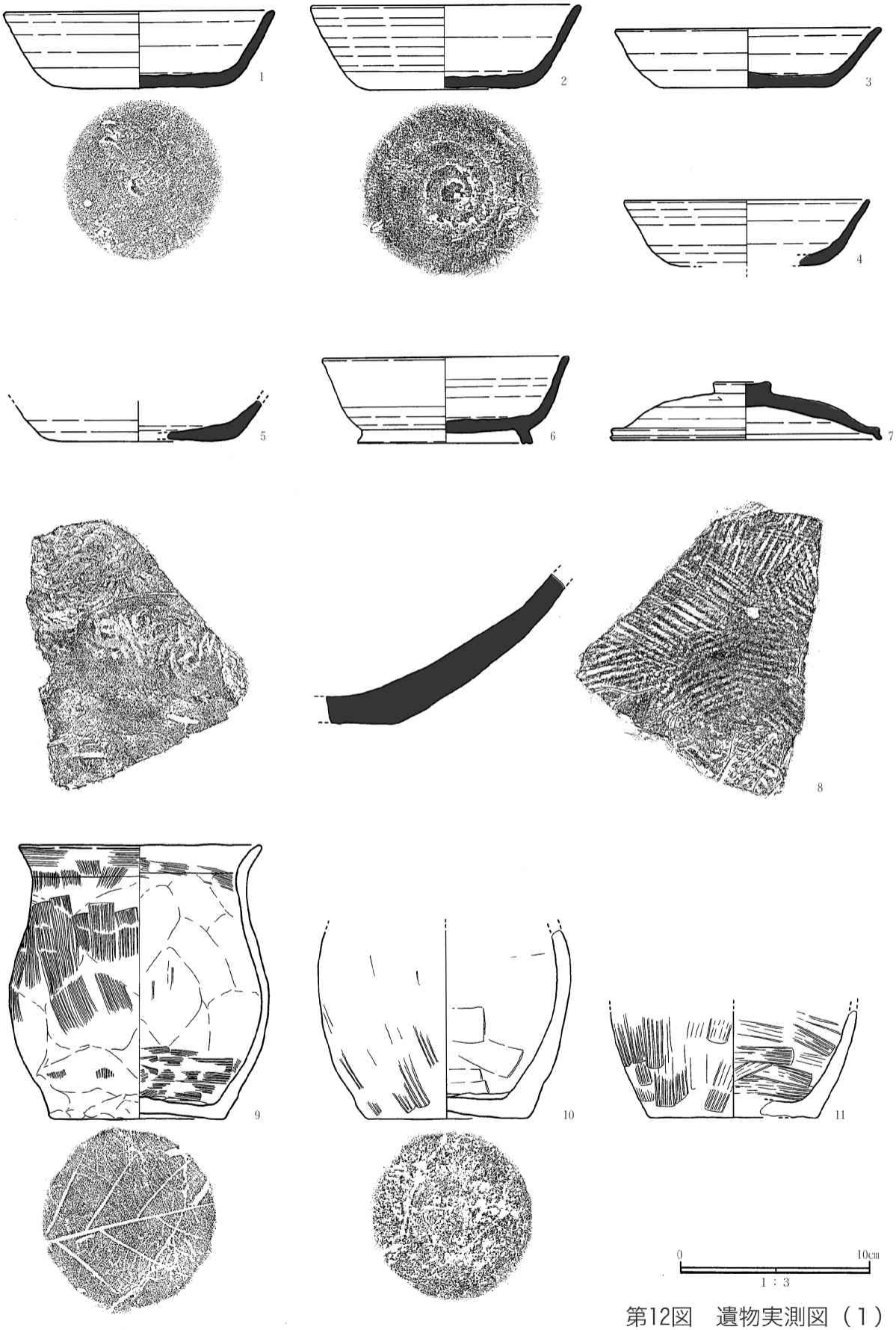
坏はすべてロクロ成形で、24～27の４点を図化した。これらはすべて撹乱から出土している。24・25は体部のみの破片であるが、体部立ち上がりから、底径が小さく直線的に外反する形状であると考えられる。26・27は下半部のみの破片である。底部切り離し技法は回転糸切り技法で、底部調整は見られない。

３　その他（第14図）

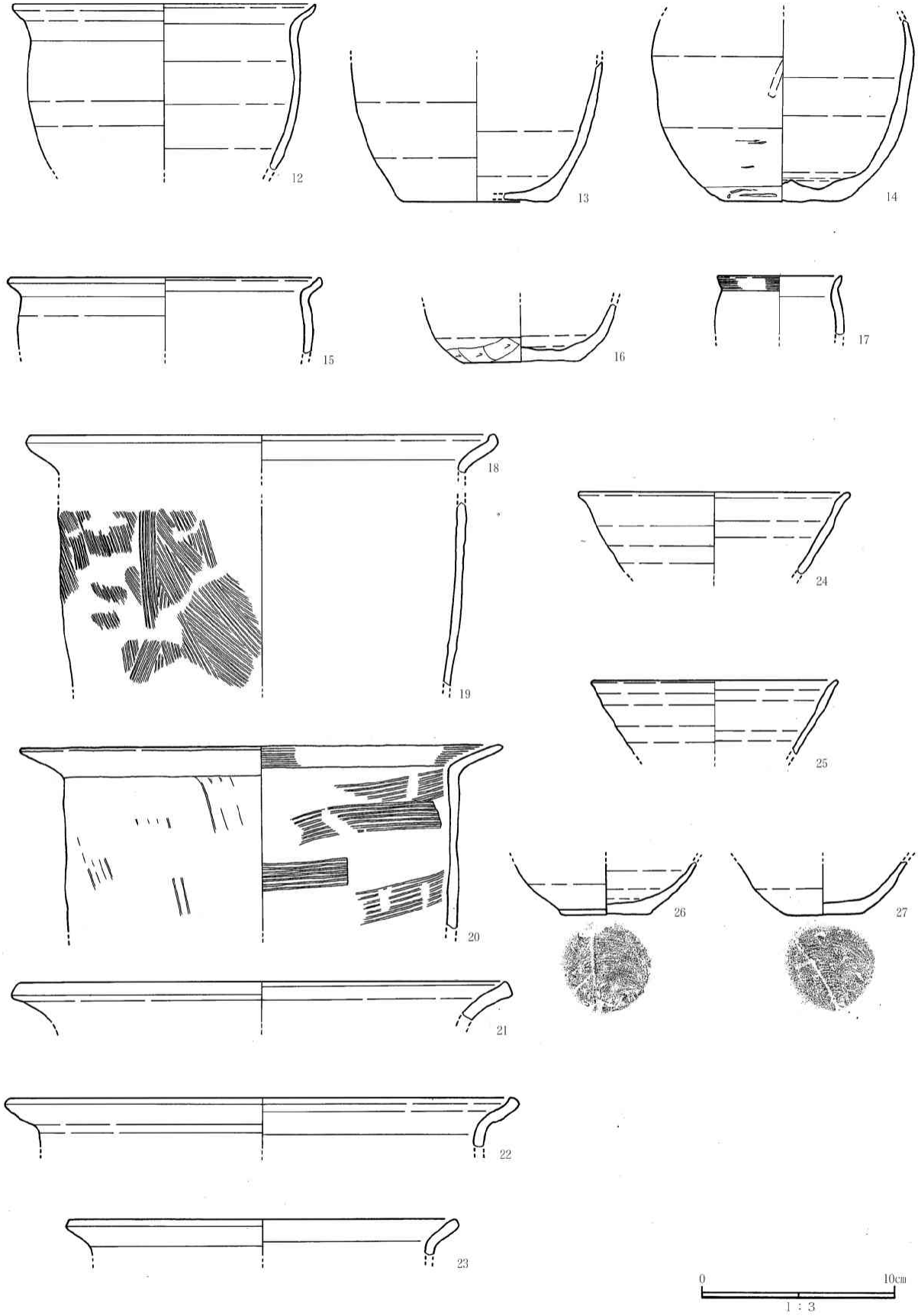
竪穴住居跡ＳＴ１・２の、カマド内及びカマド周辺から出土した礫28・29・30・31・32及び、表面採集や撹乱出土の磨石や、竪穴住居跡ＳＴ２の覆土に混入していた34・35などである。

28は、竪穴住居跡ＳＴ１カマド内の中央から検出された。全体に被熱しており、支脚として使用されたと考えられる。29は竪穴住居跡ＳＴ２のカマド内から出土した。支脚とも考えられるが被熱の痕跡が明確ではなく、壁際から立った状態で検出されたことから、カマドの構築材とも考えられる。上端側に磨痕が見られる。30・31は竪穴住居跡ＳＴ１のカマドの東側から出土した。形状は扁平で、表面には磨痕がある。また、竪穴住居跡ＳＴ１のカマド内から、割れた状態で出土した32や、これらよりも小型であるが、竪穴住居跡ＳＴ２のカマド覆土内から出土したものにも同様に磨痕が見られる。

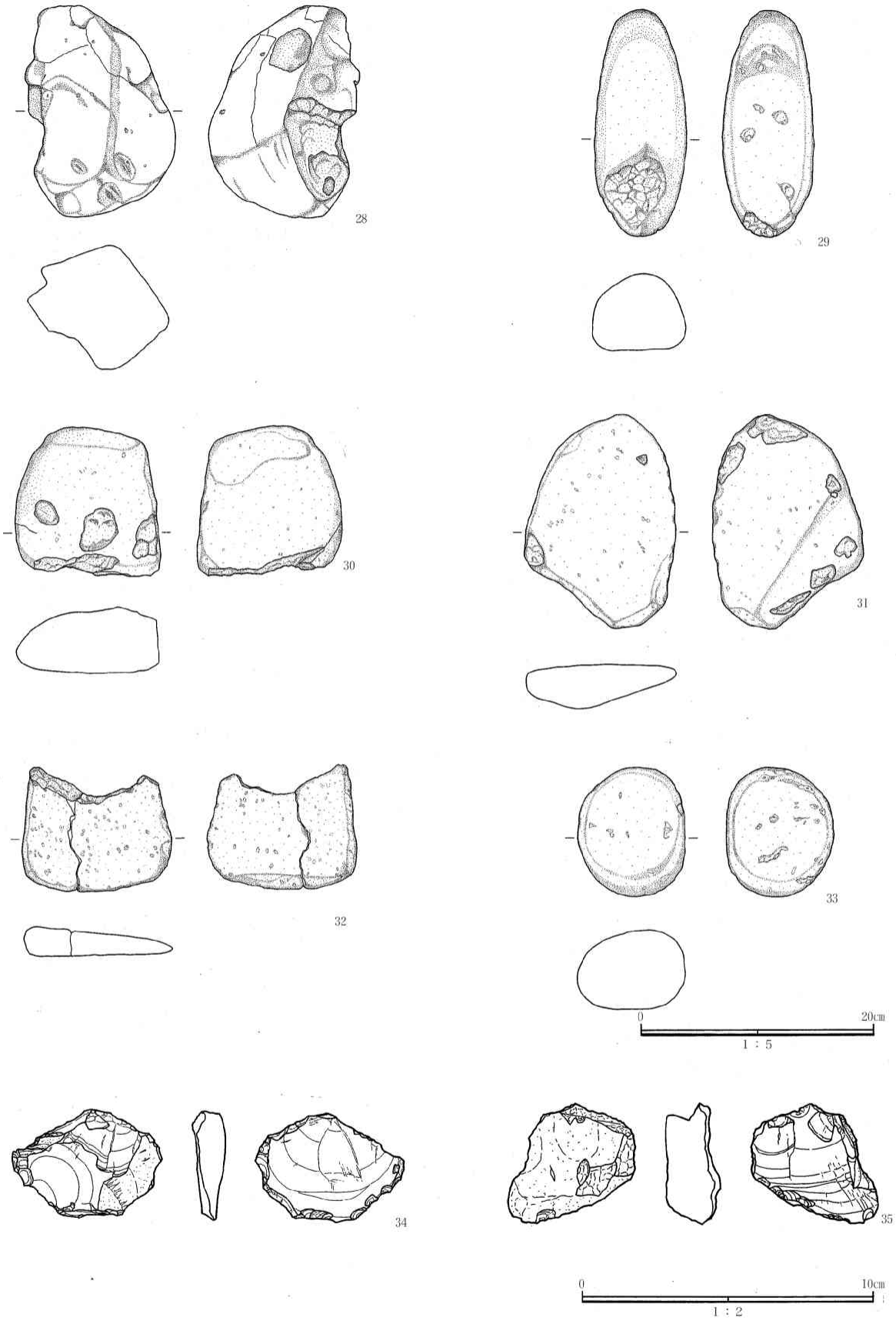
縄文時代の石器は頁岩製の剥片34・35や、磨石33が出土した。34・35はＳＴ２の覆土に混入したもの、33は表採によるものである。



第12図　遺物実測図（1）



第13図　遺物実測図（2）



第14図　遺物実測図（3）

表１　土器観察表

挿図番号	器種	器形	出土地点	法量（mm）口径	底径	器高	器厚	成形 外面	内面	底部切離	胎土	焼成	色調	備考	登録番号
1	須恵器	坏	ST6 F 44-30G	144	88	40	7	ロクロ	ロクロ	回転ヘラ切	砂粒少 海綿骨針やや多	やや軟質	灰白色		2
2			ST2 F 44-32G	143	90	45	5	ロクロ	ロクロ	ヘラ切	細砂含	やや軟質	灰褐色		9
3			ST6 Y 44-30G	140	90	31	6			回転ヘラ切	粗砂少	非常に軟質	赤褐色	内外面とも剥離がひどい	4
4			ST2	(130)			5	ロクロ	ロクロ		細砂極少	軟質	灰白色		26
5			ST2 F 44-31G		(86)		6	ロクロ	ロクロ	回転ヘラ切	細砂極少	軟質	灰白色		30
6	須恵器	高台付坏	ST6 F 44-30G	130	92	46	7	ロクロ	ロクロ	回転ヘラ切	砂粒多	硬質	灰色		1
7	須恵器	蓋	ST2 44-31G	143		31	7	ロクロケズリ	ロクロ		砂粒多	硬質	灰色		18
8	須恵器	甕	ST2 Y 44-31G				12	平行タタキ	アテ		砂粒含	良	灰白色		17
9	土師器	甕	ST6 F 44-29G	(126)	90	145	6	ハケメ	指押さえ ハケメ	木葉痕	砂粒少	良	褐色		7
10			ST6 F 44-36G		85		10	ハケメ	ヘラナデ	木葉痕	砂粒やや多	やや軟質	赤褐色		6
11			ST1 Y 42-30G		(90)		8	ハケメ	ハケメ		粗砂多	良	褐色		15
12			ST6 F 44-29G	(156)			4	ロクロ	ロクロ		粗砂含	やや軟質	褐色	赤焼土器　内外面とも剥離がひどい	8
13			ST6 F 44-29G		(76)		5				粗砂含	やや軟質	褐色	赤焼土器　内外面とも剥離がひどい	8
14			ST2 44-31G		60		7				粗砂少	軟質	浅黄橙色	赤焼土器 底面に輪積痕	10
15			ST2 44-31G	(160)			4				粗砂少	やや軟質	橙色	赤焼土器　内外面とも剥離がひどい	27
16			ST6 F 44-30G		(60)		5	ヘラケズリ		回転ヘラ切	粗砂多	良	褐色	赤焼土器	32
17			ST2 Y 44-31G	(65)			4	ヨコナデ			砂粒含	良	褐色	赤焼土器	29
18			ST１ Y 41-29G	(120)			5.5	ヨコナデ			砂粒多	良	黄褐色		15
19			ST１ Y 42-29G				5	ハケメ			砂粒多	良	黄褐色		15
20			ST2 F 44-31G	(248)			5	ハケメ	ハケメ		砂粒極少	やや軟質	黄褐色		33
21			ST2 44-31G	(260)			7				砂粒やや多	良	橙色		24
22			ST1 Y 41-29G	(260)			5				粗砂少	やや軟質	黄橙色		31
23			ST2 F 44-31G	(200)			5				細砂極少	やや軟質	黄橙色		28
24	土師器	坏	25-23G 撹乱	140			4	ロクロ	ロクロ		砂粒少	良	橙色	赤焼土器	21
25			25-23G 撹乱	(125)			3	ロクロ	ロクロ		砂粒少	良	橙色	赤焼土器	20
26			25-23G 撹乱		45		4	ロクロ	ロクロ	回転糸切	砂粒少	良	橙色	赤焼土器	19
27			25-23G 撹乱		44		5			回転糸切	砂粒やや多	良	褐色	赤焼土器	37

表２　石器・礫観察表

挿図番号	種別	器種	出土地点	計測値（mm・g）長さ	幅	厚さ	重量	石材	備考	登録番号
28	礫		ST1 41-30G	181	128	105	2645		被熱，支脚として使用	16
29			ST2 44-31G	193	79	65	1324.5		擦痕あり	34
30			ST1 42-30G	128	124	56	1424.4		擦痕あり	11
31			ST1 42-30G	183	129	37	1108.7		擦痕あり	12
32			ST1 41-30G	106	128	25	434.2		擦痕あり	13・14
33	石器	磨石	表採	111	92	68	886		擦痕あり	38
34	石器	剥片	ST2	37	51	12	18.2	頁岩	縁辺に二次加工痕あり	35
35			ST2	41	44	19	35.7	頁岩	縁辺に二次加工痕あり	36

Ⅵ　第４次発掘調査のまとめ

次章で平成10年度から13年度の４回にわたる発掘調査のまとめを述べるので、ここでは４次調査のみの成果を報告する。

今回の第４次発掘調査もこれまでと同じく、山形県立救護施設みやま荘改築整備事業に係るものである。４次調査は調査面積1,500㎡。４回の調査で四ツ塚遺跡の推定面積約70,000㎡のうち、11,000㎡が調査された。

検出された遺構は竪穴住居跡・竪穴状遺構・掘立柱建物跡・溝跡・陥穴・土坑・柱穴・ピットである。調査面積の54.1％が撹乱されており、遺存状態は悪い。

竪穴状遺構ＳＴ６の床面から須恵器坏３が完形で出土している。底部切り離し技法は回転ヘラ切り技法であり、その後ナデ調整している。「山形の古代土器編年」（阿部明彦・水戸弘美　1999）[15]によれば８世紀第４四半期～９世紀第１四半期に位置付けられる。ＳＴ６から他に出土している遺物も同時期のものが主体をなす。ただし、覆土から出土している16の土師器甕（赤焼土器）については、この時期の一群には入らない。

竪穴住居跡ＳＴ１とＳＴ２の床面から時期を推定できる遺物は出土していないが、主体となる土器、主軸の方向から竪穴状遺構ＳＴ６と同時期であると考えられる。ただしＳＴ２の土師器甕20は他の時期の所産である。ＳＴ６の土師器甕16、ＳＴ２の土師器甕20は、時期の判断が難しい遺物だが、１～３次調査で10世紀初頭の遺構群が検出されていることから、この時期のものが覆土内に混入したと考えられる。

掘立柱建物跡ＳＢ65の柱穴は、２次調査区内のＳＢ２の柱穴と組み合い、同一の遺構であることが確認された。２次の報告[16]では中世とされている。

溝跡ＳＤ７は２次調査区の15世紀頃の青磁碗が出土しているＳＤ124と３次調査区のＳＤ98と同一の溝跡である。同様にＳＤ９も２次調査区のＳＤ362と繋がる。またＳＤ９・11では出土遺物はないが、主軸の方向から２次調査区のＳＤ124と同じく15世紀頃のものと考えられる。

陥穴は３基検出された。いずれも底面に逆茂木を立てたと考えられるピットをもつ。出土遺物はなく時期は不明であるが、周辺には岩木Ａ遺跡（前期）・岩木Ｂ遺跡（前・中期）などの縄文時代の遺跡が確認されており、関連する可能性がある。

４次調査でも、これまで通り古代の集落跡、中世の区画溝に囲まれた集落跡が確認された。隣接する２・３次調査区の遺構とも関連している。また、初めて縄文時代と考えられる陥穴も検出された。遺物については８世紀第４四半期から９世紀第１四半期を中心に、10世紀初頭の土器、縄文時代の石器などが出土した。中世に位置付けられるような遺物の出土は無かった。

Ⅶ　四ツ塚遺跡の調査成果

四ツ塚遺跡の発掘調査は平成10年度から14年度にかけて継続して行われてきた。調査原因は、山形県立救護施設みやま荘改築整備事業である。調査は平成14年度の４次調査をもって終了する。なお報告書は逐次刊行されており、全部で１次調査から４次調査までの四冊の報告書が刊行されたことになる。

１次から３次調査の報告書に示された標高値は、誤認により実際の標高より2.75m高いことが、４次調査で明らかとなった。ここで訂正する。

総面積11,000㎡の調査区からは多種多様の遺構が検出された。また時期も複数にわたる。本遺跡は寒河江川扇状地前縁部と、葉山南麓山地から続く大久保段丘の境界に位置しており、この遺跡の多様な内容も、異なる地形分類の境界に位置することに起因するものと考えられる。次に遺構の配置、主軸方向、出土遺物の検討を行い各時期ごとの遺構群のまとまりを示す。

各次の調査で遺構・遺物に付した番号は、異なる年度の調査同士で重複することがある。そのためこの章では、遺構番号の後の括弧内の数字で何次の調査によるものかを示す。

また、１次から３次の調査の中で竪穴住居跡として報告されているものがあるが、いずれもカマドなどの施設を持たず、住居跡とは考えられないため、本文では竪穴状遺構として扱う。

遺構の主軸の振れは４次調査では平面直角座標系第Ｘ系のＸ軸に対する傾きを計測したが、１次から３次の調査では磁北をもとに計測している。本章で示す主軸の振れはすべて４次調査で行った方法で再計測した値を記載しているため、１～３次の報告書の記載と異なる場合がある。

縄文時代の遺構

四次調査で初めて縄文時代と考えられる陥穴がＳＫ５・８・19（４次）の３基検出された。また、３次調査で検出されたＳＫ113（３次）は、報告書では性格不明の土坑とされていたが、４次調査で検出された陥穴列の延長上に位置することから、遺構の形態も考慮に入れた上で陥穴とした。ただし、逆茂木を立てたと考えられるピットは見られない。全部で検出された陥穴は４基となる。

四ツ塚遺跡付近の地形は北西から南東へ下る傾斜地で、陥穴列は調査区の中でも標高の高い地点に、等高線に平行する配置で検出された。分布位置は大久保台地の縁辺部であり、先の寒河江川扇状地前縁部の湧水地へ集まる獲物を狙ったものといえる。これらの遺構群をⅠ期とする。

縄文時代の遺物は一次から四次調査を通じて、他時期の遺構の覆土中に散見されており、他の縄文時代の遺跡から混入したものと判断できる。付近には岩木Ａ遺跡（中期）、岩木Ｂ遺跡（前・中期）などが存在している。

古代の遺構

奈良時代から平安時代にかけての遺構として竪穴住居跡ＳＴ１（４次）・ＳＴ２（４次）、竪穴状遺構ＳＴ６（４次）・ＳＴ365（２次）・ＳＴ22（３次）の５基が検出された。調査区の西半、傾斜地の比較的高い位置に分布しており、この時期の集落の広がりを示すものと考えられる。遺構の遺存状態は悪く、いずれも浅いことから、遺跡が削平されていなければ、集落はさらに西へと続いていたと言える。また、これらの竪穴住居跡・竪穴状遺構の主軸の振れは北で西に６～22度の範囲に収まっている。出土遺物（第15～19図）は竪穴状遺構ＳＴ６（４次）の床面から出土している須恵器坏（第17図、３）をはじめ、８世紀第４四半期から９世紀第１四半期のものが主体である。この遺構群を同時期のものとして捉え、Ⅱ期としておく。

他に出土遺物（第20図）から10世紀初頭と考えられる竪穴状遺構ＳＴ652（２次）がある。この遺構の主軸の方向はＮ８°Ｅである。この遺構以外に10世紀初頭のものとして報告された遺構はないが、掘立柱建物跡ＳＢ１（１次）は主軸の振れが北で東に約１度で、ＳＴ652（２次）に近い。出土する遺物で明確に時期を示すものは見られないが、主軸の方位をもとにＳＴ652（２次）に近い時期と考えられる。

掘立柱建物跡ＳＢ４（２次）は周囲に二重に溝跡を巡らすという特徴を持ち注目される。特別な意味を持つ遺構の可能性があるが、具体的な内容を示す証左は検出されていない。建物の周囲を巡る溝跡から出土する遺物から８世紀後半と報告されているが、主軸はＮ９°Ｅを示し、やはりＳＴ652（２次）に近い。出土遺物の示す年代は遺構の上限を示すものとして捉え、ＳＴ652（２次）と同じ時期として考えたい。

これらの遺構群は先に述べたⅡ期の遺構群よりも南東の比較的低い斜面上に分布している。主軸の方位と遺構の分布から10世紀初頭の同時期のまとまりとして考え、Ⅲ期とする。

中世の遺構

竪穴状遺構ＳＴ405・656・657・658・1031・1034・1038・1615（１次）ではカマドなどの施設は検出されず、住居跡とは考えられない。これらの竪穴状遺構の主軸の振れはN50～70°Wである。またＳＴ658（１次）からは北宋銭（第21図）の「至道元寳」（行書）が出土している。初鋳年は995年だが、渡来銭が日本国内において広く流通するようになるのは中世に入ってからのことである。ＳＴ658（１次）付近に見られる竪穴状遺構群も主軸の振れ、遺構の状態から同様の時期と考えられている。

掘立柱建物跡ＳＢ1616（１次）・ＳＢ２（２次）・ＳＢ３（２次）の主軸の振れもN63～66°Wを示し、先の竪穴状遺構群に近いが、やはり明確に時期が判別できる遺物の出土はなく、主軸の振れから、中世の所産と考えられている。他に竪穴状遺構群の付近に多数の柱穴と考えられる遺構が見られるが、これらの組み合わせを再検討することにより、さらに多くの掘立柱建物跡が検出される可能性がある。

溝跡ＳＤ555（１次）、同じ溝跡で２次調査区で検出された溝跡ＳＤ959（２次）、平行し

て検出された溝跡ＳＤ1002（１次）と、同じく２次調査区内で検出された溝跡ＳＤ124（２次）もやはり主軸の振れから、同じく中世のものと考えられる。ＳＤ124（２次）から15世紀頃のものと考えられる青磁碗（第22図）が出土している。この２条の溝跡は道路跡の側溝と考えられ、方位は溝跡の心々で、N50°Wである。幅は溝跡の心々間で平均4.2mである。この道路跡に直交する溝跡ＳＤ1605（１次）・ＳＤ1606（１次）・ＳＤ1607（１次）・ＳＤ1610（１次）・ＳＤ312（２次）などが見られるが、やはり同時期とすべきであり、中世の集落の区画溝と考えられる。

これら中世の所産とされる遺構群の主軸の振れはN50～66°Wの範囲内にある。他の時期の遺構でこの方位に近いものは見られず、一つの時期的なまとまりとして捉えれば、15世紀頃の四ツ塚遺跡の集落は, N50～66°Wという一定の方角に合わせて造られたと考えられる。これら中世の遺構群をⅣ期とする。また、これら中世の遺構群の主体は、Ⅱ期・Ⅲ期の遺構群よりもさらに南東側の標高の低い面に分布するようになる。

井戸跡は主に調査区の最も南東側、中世の遺構群が数多く見られる地点付近に集中する。この井戸跡が多く見られる場所は、先に述べた寒河江川扇状地前縁部であり、地下水が豊富で、井戸を構築するのに適した場所である。遺物は土師器・須恵器が少量出土しているが、古代、あるいは中世のどちらに当てられるか判然としない。ただし、井戸跡ＳＥ1465（１次）では915年に降灰の記録が残る十和田ａテフラが検出されており、Ｂ類の時期に入る。１次調査の報告書では溝跡ＳＤ555（１次）を切っているとして、ＳＤ555（１次）を915年以前としている。その後、２次調査で同時期の溝跡と考えられるＳＤ124（２次）から先に述べた15世紀の青磁碗が出土するに及び、１次調査でのＳＤ555（１次）とＳＥ1465（１次）の新旧関係は再考を迫られた。その結果、２次調査の報告では新旧が逆転し、ＳＥ1465（１次）を古代、ＳＤ555（１次）は青磁碗の年代をもとに中世のものとして報告されたのである。今回の報告では２次調査の報告書での、溝跡の覆土は井戸跡の覆土中に含まれるという見解[17]を採り、ＳＤ555（１次）を中世として考える。

まとめ

四ツ塚遺跡は縄文時代、８世紀第４四半期から９世紀第１四半期、10世紀初頭、中世の複数の時代にまたがって営まれた遺跡である。出土する遺物は十分な資料とは言えず、遺跡の内容を把握するのは困難だが、主な遺構の主軸の方位、地形区分上の分布などから、各時期の遺構をまとめ、遺構の変遷を考察した。最後にその要約を記す。

Ⅰ期は縄文時代の陥穴。調査区の北西側、台地の縁辺部で、標高の高い地点に位置する。４基確認され、等高線に沿うように列状に配置される。

Ⅱ期は８世紀第４四半期から９世紀第１四半期とした。調査区の西側、標高の高い地点に、主軸がＮ６～22°Wに振れる遺構群。竪穴住居跡、竪穴状遺構などからなる集落跡である。

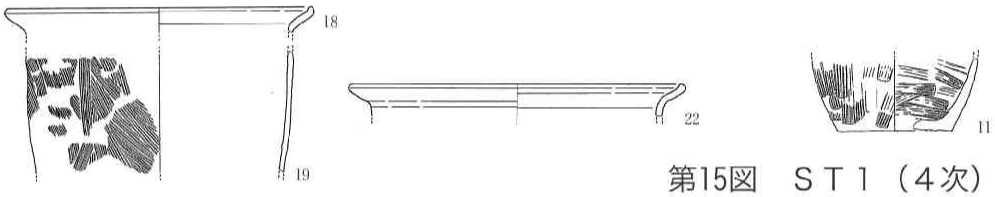
Ⅲ期は10世紀初頭で、Ⅱ期より一段低い位置に分布し、主軸がＮ１～９°Ｅに振れる遺構群。竪穴状遺構、掘立柱建物跡、十和田ａテフラが検出された井戸跡ＳＥ1465（１次）

などからなる集落跡である。

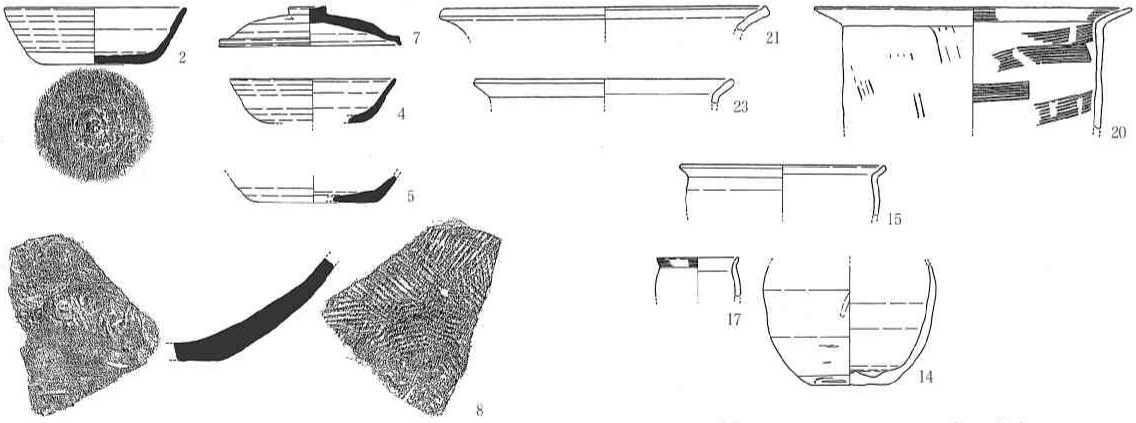
Ⅳ期は中世で、主に調査区内でも最も低い位置に分布する。主軸の振れはN50～70°Wである。竪穴状遺構、掘立柱建物跡、道路跡、そして道路跡と直交する区画溝などからなる集落跡である。

井戸跡については、平面形が円形であり、主軸が不明であることと、分布が湧水地に限定されることから、ＳＥ1465（１次）以外は特に分類しなかった。

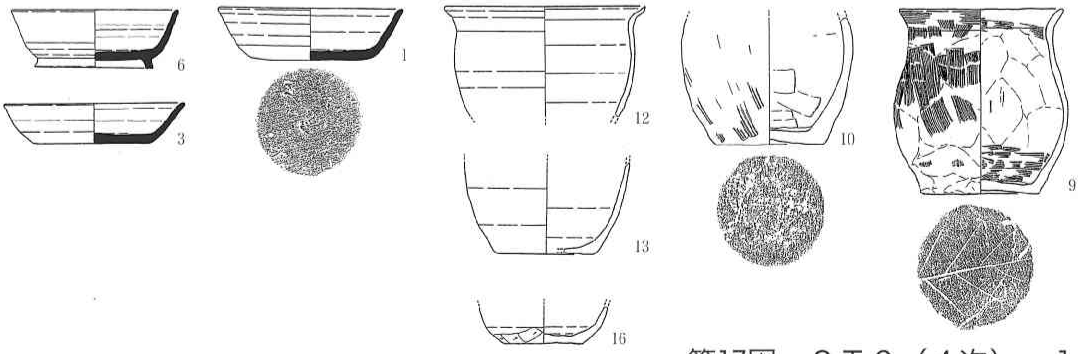
この分析では、古代から中世の集落は低地へ向かって降りていく状況が見える。また、各時期の遺構群はそれぞれ一つの決まった方角にある程度規制されて構築されていることも分った。つまり、先に構築された遺構の方位に規制されて新しい遺構が構築されるためか、あるいは初めから一つの方位に揃えて集落を造ったかのどちらかと考えて良いだろう。方角、配置などさまざまに制約を受けながら集落は構成されるが、さらに規模、形態にも同様に制約を受けていたことも考えられる。今後は四ツ塚遺跡をはじめ他の遺跡でも更なる検討を行い、集落の構成、消長を考えていく必要がある。



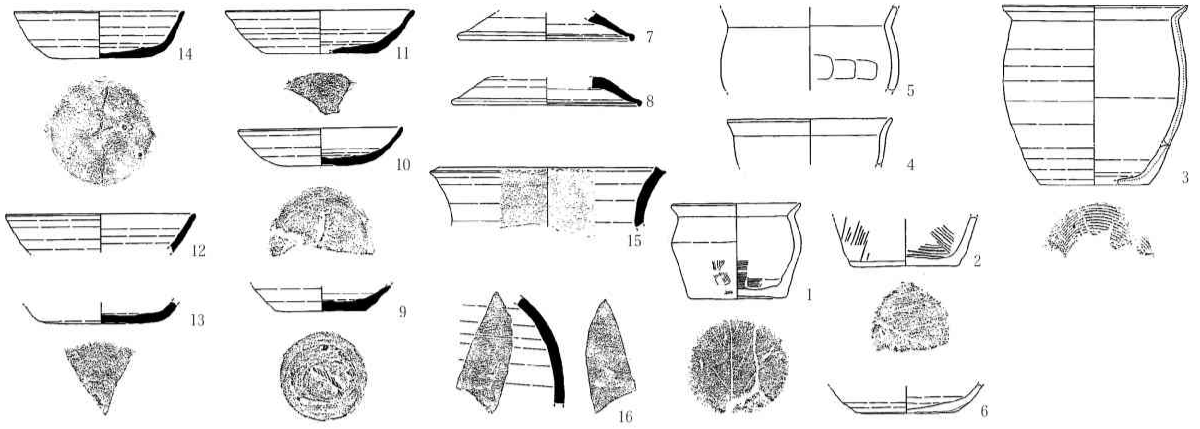
第15図　ＳＴ１（４次）　１：６



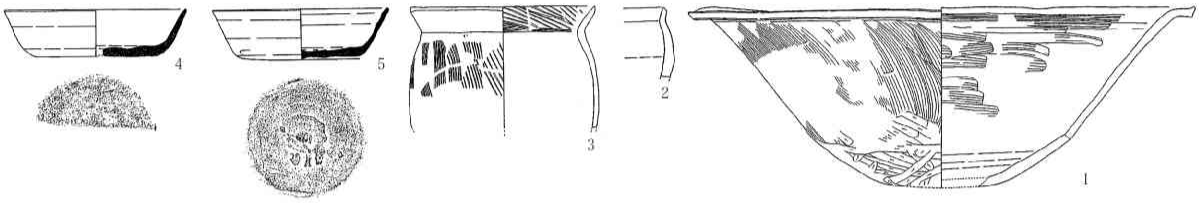
第16図　ＳＴ２（４次）　１：６



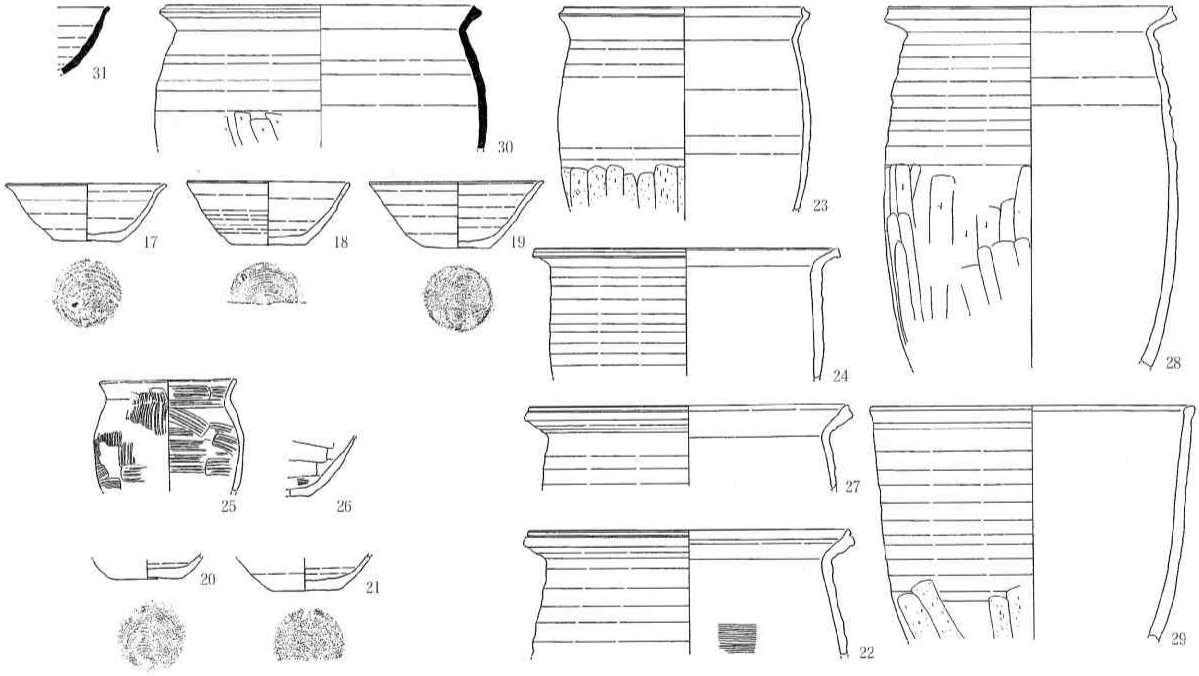
第17図　ＳＴ６（４次）　１：６



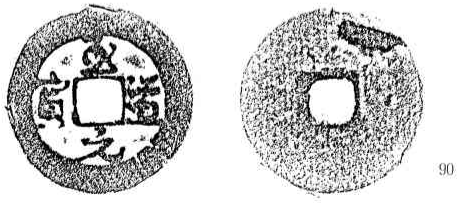
第18図　ＳＴ365（２次）　１：６



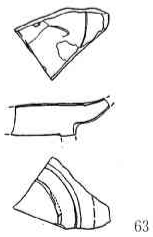
第19図　ＳＴ22（３次）　１：６



第20図　ＳＴ652（２次）　１：６



第21図　ＳＴ658（１次）　１：１



第22図　ＳＤ124（２次）　１：４

註

1 a 高橋敏他　1999　『四ツ塚遺跡発掘調査報告書』（山形県埋蔵文化財センター調査報告書第70集）
財団法人山形県埋蔵文化財センター

b 岡部　博・豊野潤子　2000　『四ツ塚遺跡第２次発掘調査報告書』
（山形県埋蔵文化財センター調査報告書第74集）
財団法人山形県埋蔵文化財センター

c 岡部　博・豊野潤子　2001　『四ツ塚遺跡第３次発掘調査報告書』
（山形県埋蔵文化財センター調査報告書第90集）
財団法人山形県埋蔵文化財センター

2　今田史明　2001　『花ノ木遺跡発掘調査報告書』（河北町埋蔵文化財調査報告書第４集）
河北町教育委員会

3　長橋　至　1981　『下槇遺跡発掘調査報告書』（山形県埋蔵文化財調査報告書第39集）
山形県教育委員会

4　佐藤庄一・安部実　1980　『熊野台遺跡発掘調査報告書』（山形県埋蔵文化財調査報告書第31集）
山形県教育委員会

5　野川主計他　1981　『畑中（一の坪）遺跡発掘調査報告書』（河北町埋蔵文化財調査報告書第２集）
河北町教育委員会

6　長橋　至　1986　『不動木遺跡発掘調査報告書』（山形県埋蔵文化財調査報告書第100集）
山形県教育委員会

7　野川主計・高橋郁夫　1982　『月山堂遺跡発掘調査報告書』（河北町埋蔵文化財調査報告書第３集）
河北町教育委員会

8　野川主計他　1980　『溝延馬場遺跡発掘調査報告書』（河北町埋蔵文化財調査報告書第１集）
河北町教育委員会

9　前掲註４文献、ｐ.62

10　阿部明彦他　1979　『山辺条里遺跡』（山形県埋蔵文化財調査報告書第22集）山形県教育委員会

11　山形県教育委員会　1973　『東根市西北平坦部の遺跡群－古墳から条里へ－』

12　佐藤庄一・保角里志　1982　「地下に埋もれていた条里遺構」『山形県史　第一巻　原始･古代・中世編』
p.365～p.369　山形県

13 a 柏倉亮吉・伊藤　忍　1970　『平野山古窯跡群－山形県における古代窯業遺跡の研究』寒河江市教育委員会

b 宇野修平他　1984　『平野山窯跡群第14地点遺跡発掘調査報告書』
（寒河江市埋蔵文化財報告書第３集）寒河江市教育委員会

c 佐藤庄一・須賀井明子　1998　『平野山古窯跡群第12地点遺跡第２次発掘調査報告書』
（山形県埋蔵文化財センター調査報告書第52集）
財団法人山形県埋蔵文化財センター

d 須賀井新人他　1992　『平野山古窯跡群第12地点遺跡発掘調査報告書』
（山形県埋蔵文化財調査報告書第178集）山形県教育委員会

14　註１ｂ文献、p.33　第17図　遺物実測図（３）39

15　阿部明彦・水戸弘美　1999　「山形県の古代土器編年」『第25回古代城柵官衙遺跡検討会資料』p.63～p.112
古代城柵官衙遺跡検討会

16　註１ｂ文献、p.12

17　註１ｂ文献、p.21

ふりがな	よつづかいせきだいよじはっくつちょうさほうこくしょ
書名	四ツ塚遺跡第４次発掘調査報告書
副書名	
巻次	
シリーズ名	山形県埋蔵文化財センター調査報告書
シリーズ番号	第110集
編著者名	水戸部秀樹　渋谷純子
編集機関	財団法人山形県埋蔵文化財センター
所在地	〒999-3161　山形県上山市弁天二丁目15番１号　ＴＥＬ023-672-5301
発行年月日	2002年３月31日

所収遺跡名（ふりがな）	所在地（ふりがな）	コード 市町村	コード 遺跡番号	北緯	東経	調査期間	調査面積（m²）	調査原因
四ツ塚遺跡（よつづかいせき）	山形県（やまがたけん）西村山郡（にしむらやまぐん）河北町（かほくちょう）大字吉田（おおあざよしだ）字馬場（あざばば）164他	6321	481	38度26分43秒	140度18分49秒	20010514～20010614	1,500	山形県立救護施設みやま荘改築整備事業

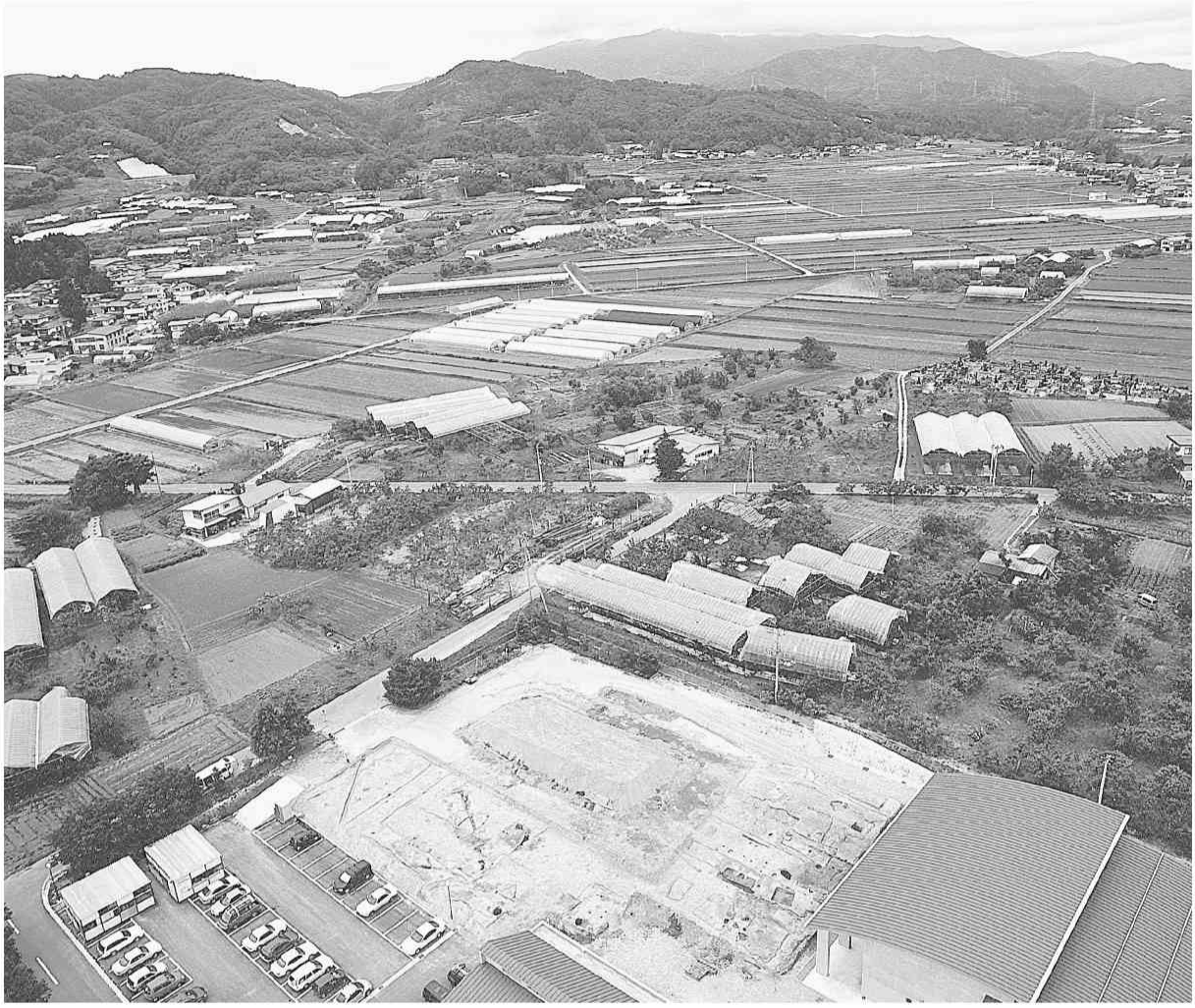
種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
狩猟場	縄文時代	陥穴		陥穴の底面に逆茂木を立てたと見られるピットを検出。
集落跡	奈良時代 平安時代	竪穴住居跡 竪穴状遺構	須恵器（坏・蓋・甕） 土師器（坏・甕） 石器	
集落跡	中世	掘立柱建物跡 溝跡		２次調査の掘立柱建物跡の続きと見られる柱穴を検出。 ２・３次調査の続きとなる溝跡を検出。

第23図　四ツ塚遺跡遺構配置図

図　　版

四ツ塚遺跡調査区（１次～４次の空中写真を合成、右が北）

図版２



第４次調査区（南東から）

竪穴住居跡ＳＴ１（南から）

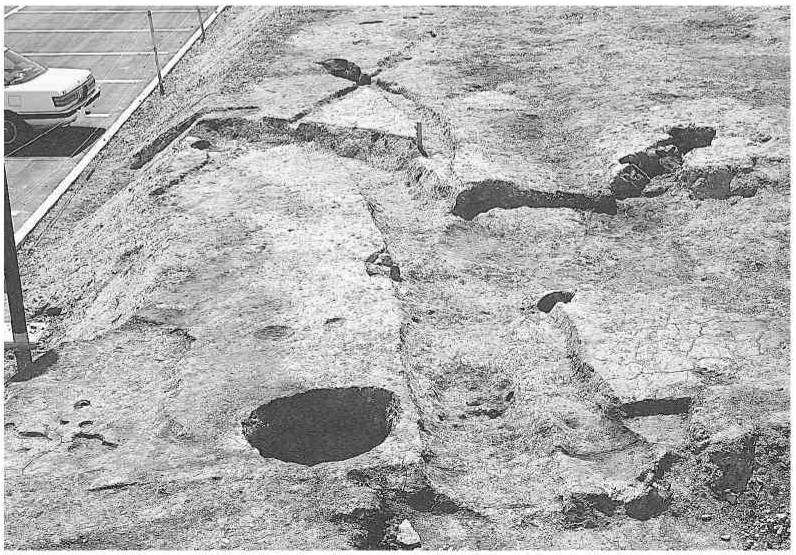
カマド（ＳＴ１）

竪穴住居跡ＳＴ２（北から）

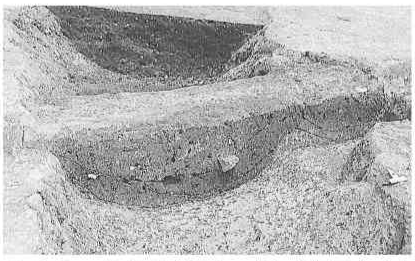
カマド（ＳＴ２）

竪穴状遺構ＳＴ６（南から）

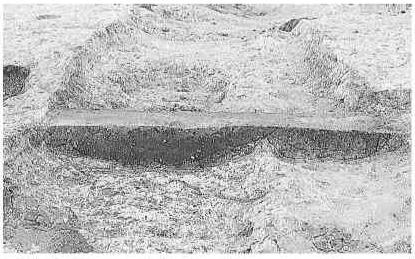
遺物出土状況（ＳＴ６）



溝跡ＳＤ７・９（東から）



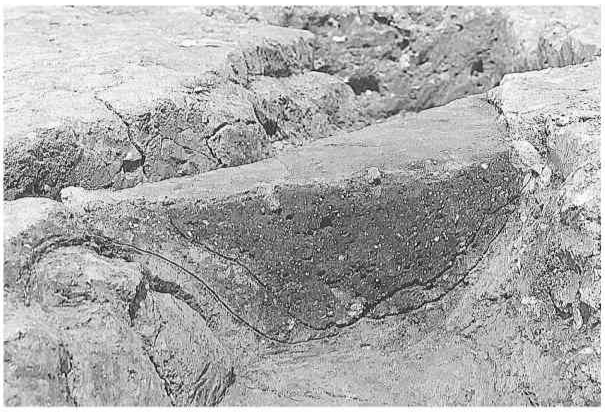
ＳＤ７・ＳＫ39断面b－b′（南西から）



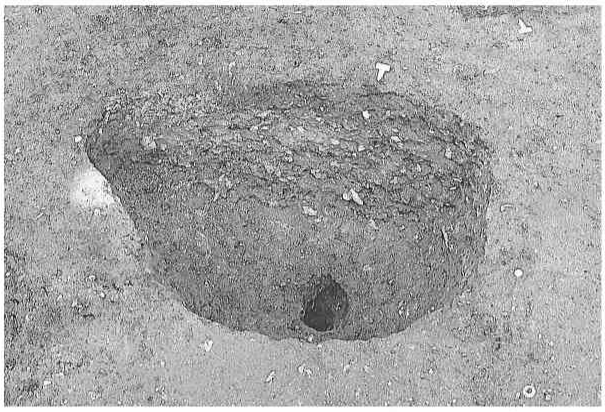
ＳＤ７・９断面e－e′（東から）

図版４

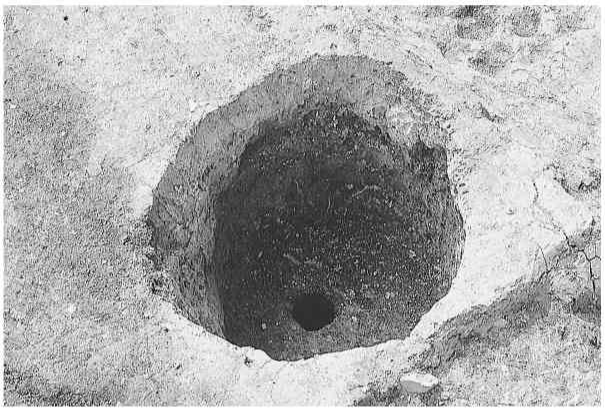
溝跡ＳＤ11断面a－a′（西から）



溝跡ＳＤ11断面c－c′（東から）

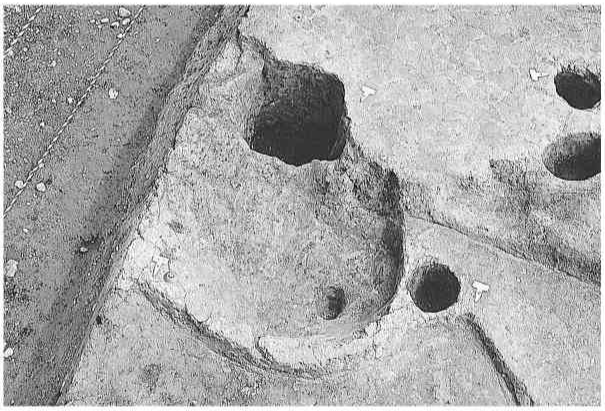


陥穴ＳＫ５（北から）



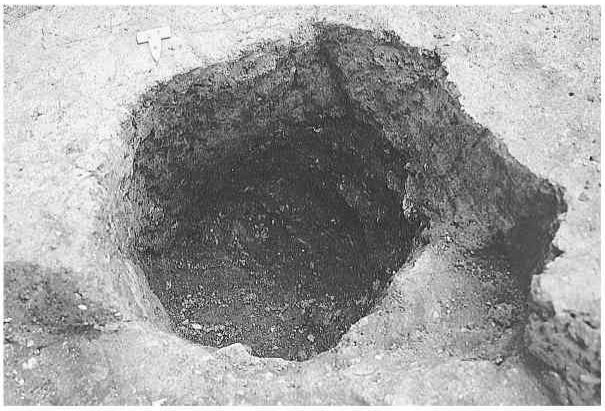
陥穴ＳＫ８（南東から）

陥穴ＳＫ19（北から）



土坑ＳＫ４・柱穴ＳＰ50・51（北から）

土坑ＳＫ27断面（南から）



柱穴ＳＰ52（北から）

４次調査出土土器

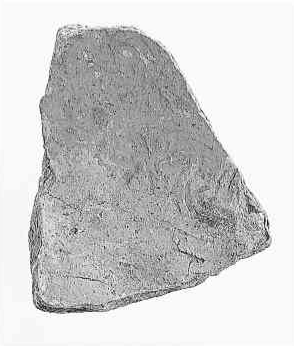
1

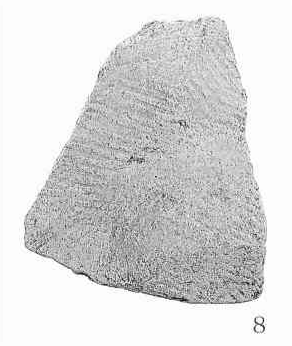
2

3

4

7

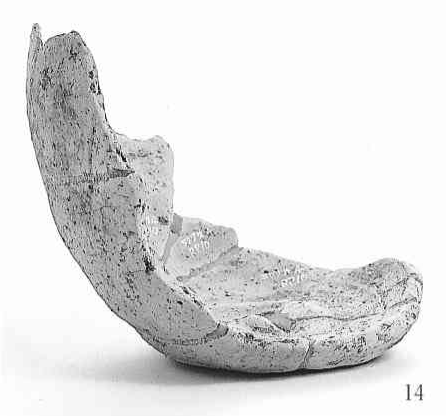


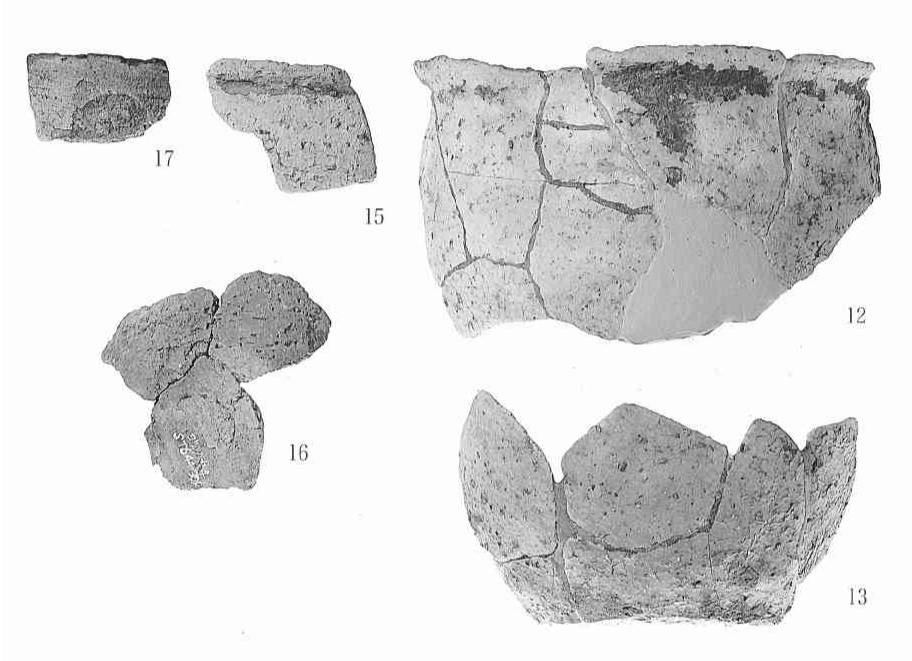


8

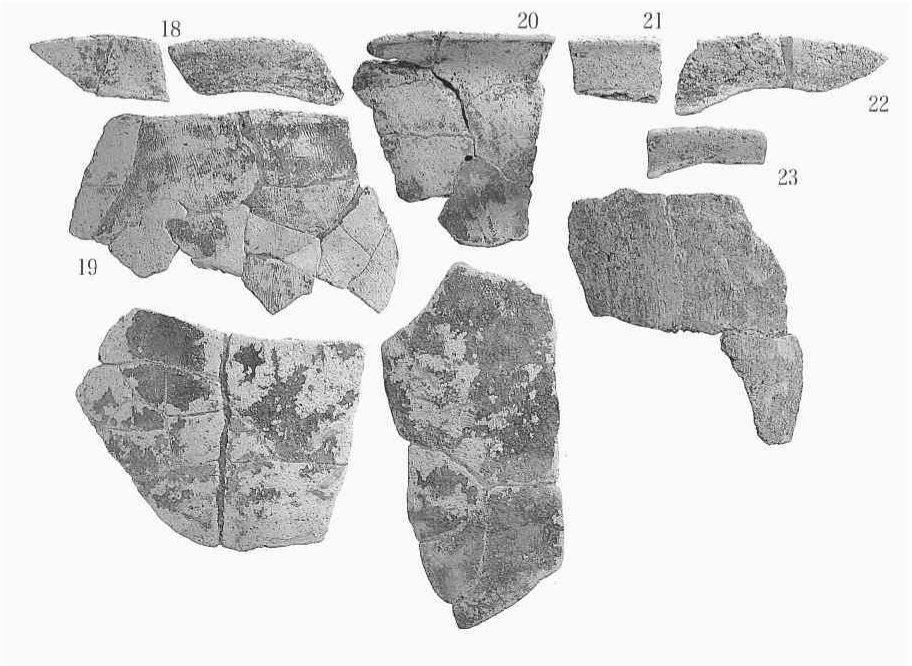
9

図版６

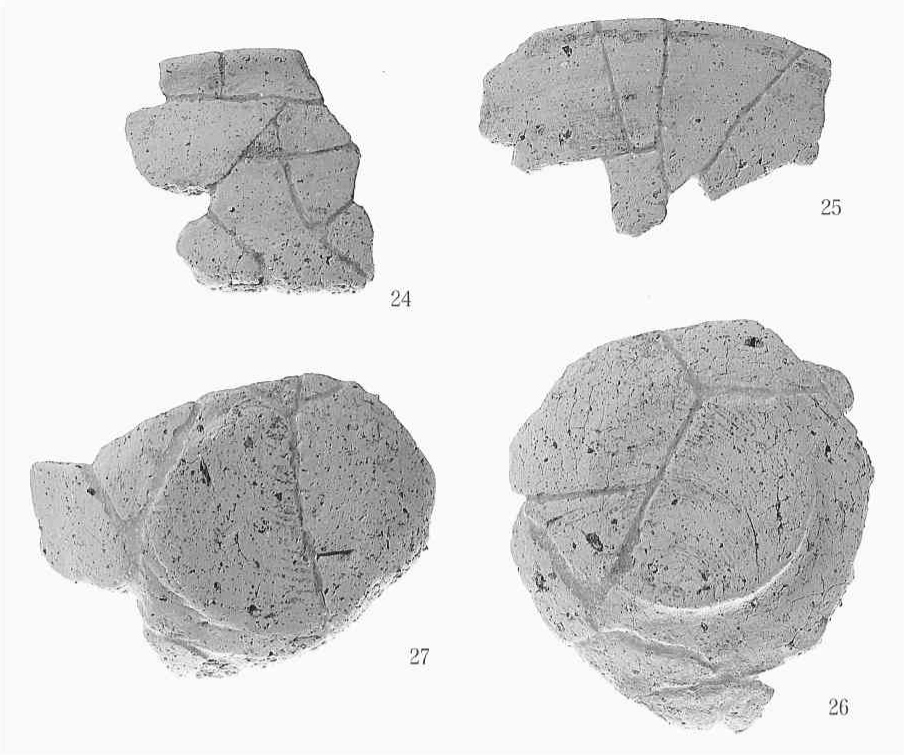




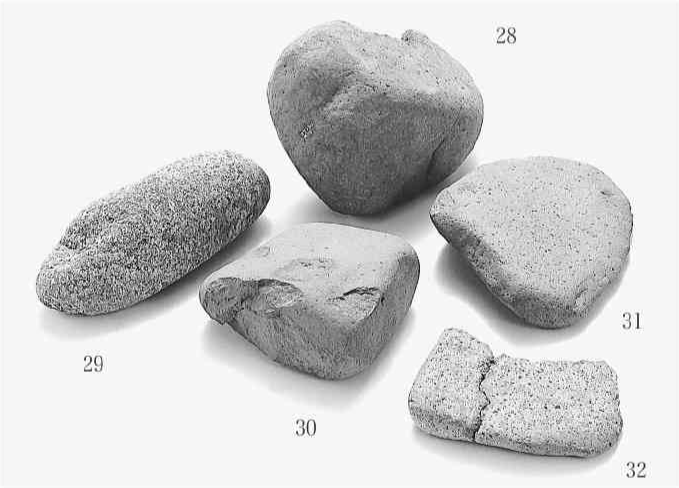
甕（赤焼土器）



長胴甕



坏（赤焼土器）

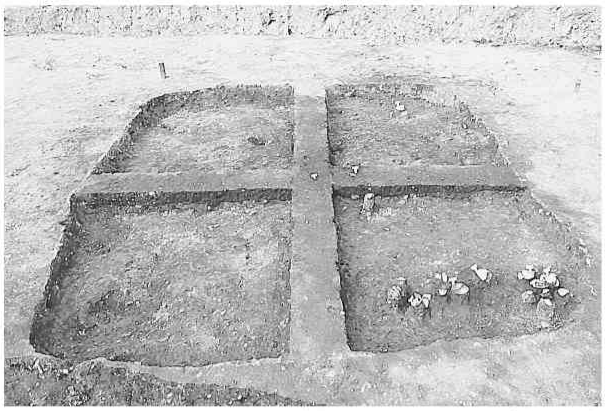


カマド周辺出土の礫

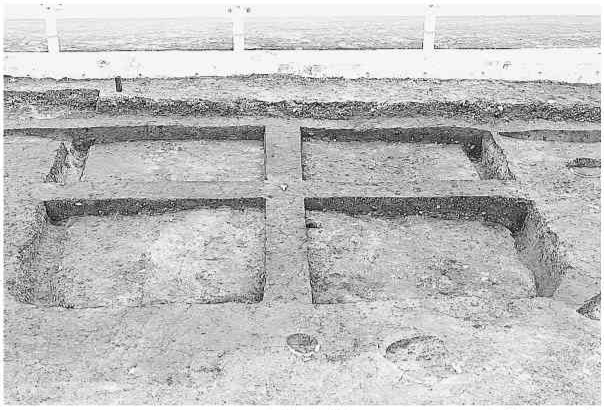
縄文時代の石器

図版８

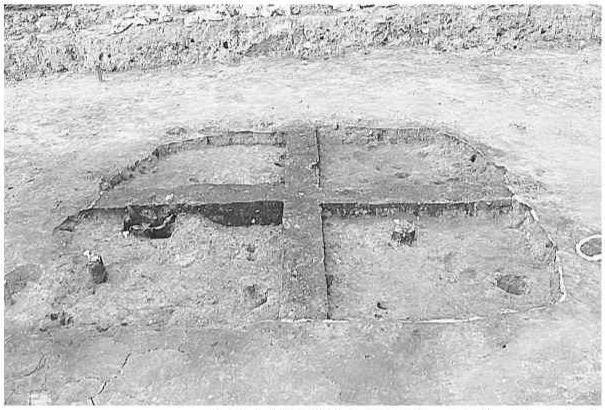
1～３次調査の主な遺構（詳細は各次の調査報告書参照）



竪穴状遺構ＳＴ365　２次（南から）



竪穴状遺構ＳＴ22　３次（北から）

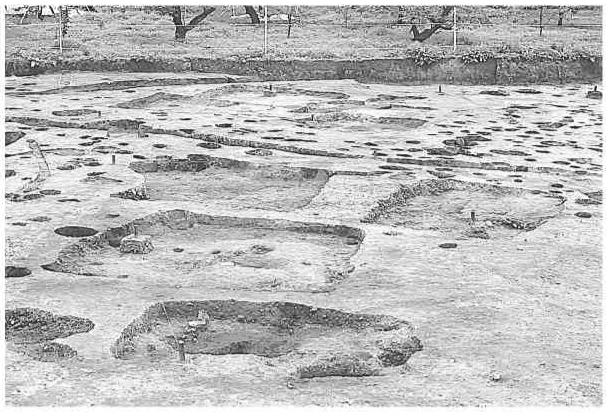


竪穴状遺構ＳＴ652　２次（東から）

掘立柱建物跡ＳＢ１　１次（南から）

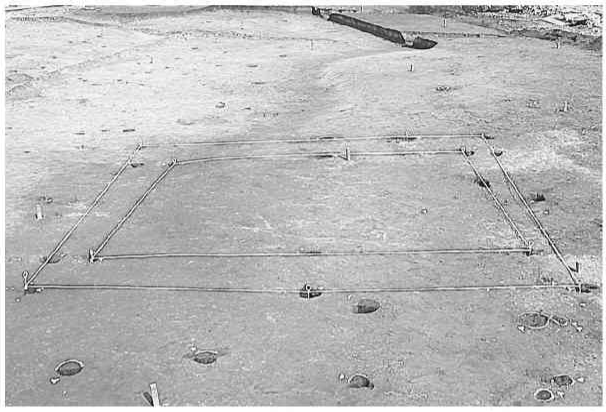
掘立柱建物跡ＳＢ４・溝跡ＳＤ520　２次（北から）

竪穴状遺構ＳＴ405・656・657・658　１次(南から)



ＳＴ1031・1034・1038・1615　１次(南から)

掘立柱建物跡ＳＢ２　２次(南東から)

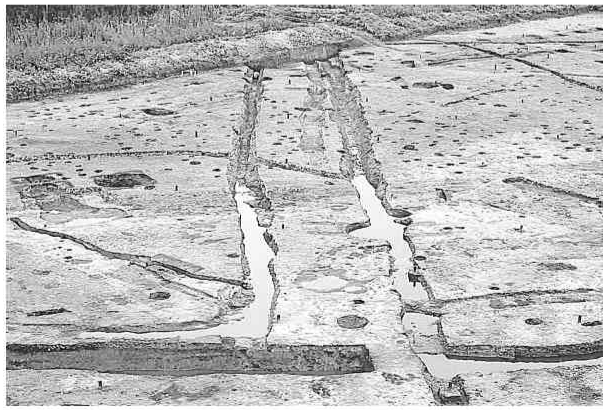


掘立柱建物跡ＳＢ３　２次(南西から)

溝跡ＳＤ124・ＳＤ959　２次(南東から)

ＳＤ123　２次(北から)

ＳＤ98　３次(南から)



溝跡ＳＤ1002・ＳＤ555　１次(南東から)

ＳＢ２の柱穴は4次調査区でも検出された。
(第７図参照)
溝跡ＳＤ124とＳＤ1002、ＳＤ959とＳＤ555は調査区を越えて確認された同一の溝跡。道路遺構と考えられる。
溝跡ＳＤ123とＳＤ98も間に４次調査区のＳＤ７を挟んで確認された同一の溝跡。

図版10

１～３次調査の主要な遺物（詳細は各次の調査報告書参照）

78（２次）

81（２次）

坏

9（１次）

16（１次）

41（２次）

42（２次）

高台付坏

32（２次）

33（２次）

黒色土器（坏、埦）

63（１次）

長頸壺

81（2次）

38（2次）

17（2次）

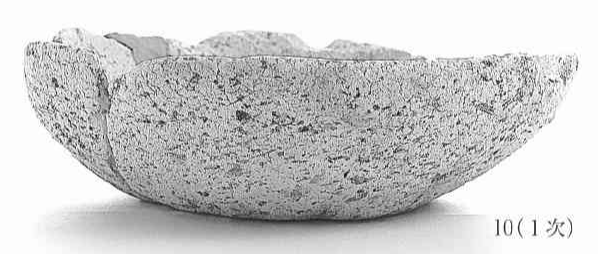
19（2次）

18（2次）

坏（赤焼土器）

28（2次）

長胴甕（赤焼土器）


10（1次）

坏（土師器）

1（3次）

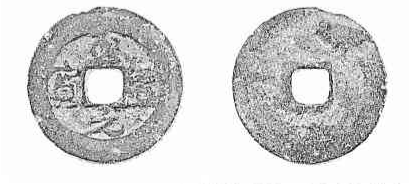
堝

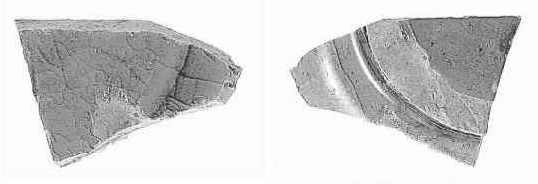
83

84

（1次）

砥石


至道元寶　90（1次）


青磁碗　63（2次）

山形県埋蔵文化財センター調査報告書第110集

四ツ塚（よつづか）遺跡第４次発掘調査報告書

2002年３月31日発行

発行　財団法人　山形県埋蔵文化財センター
〒999-3161
山形県上山市弁天二丁目15番1号
電話　023-672-5301
印刷　藤庄印刷株式会社